

ナザリック地下大墳墓にニンジャナンデ!?

酢豆腐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(前回までのあらすじ：サヴァイバー・ドージョー大将であるフォレスト・サワタリはDMMO―RPGユグドラシルサービス終了を前に、アイサツ回りをしていた。何故ならばニンジャにとつてアイサツは絶対の礼儀。古事記にもそうあるし、日本書紀にもそうあるからだ。そのアイサツ回りの最後が旧知のたち・みーと入れ替わりに加入したギルドへアインズ・ウール・ゴウンだ。モモンガが待っているぞ！サービス終了まで後僅か、急げ！フォレスト・サワタリ！急げ！)

ニンジャスレイヤー×オーバーロードの小説です。ニンジャスレイヤー要素を初見の方にも出来るだけ分かりやすくやっていきたいと思えます。ガンバロ！

目次

ナム帰りの男がナザリック入りしたようです	1
ナム帰りの男が異世界入りしたようです	9
ナム帰りの男が忠誠を捧げられるようです	17
ナム帰りの男が世界征服を夢見るようです	26
ナム帰りの男がカルネ村をアンブツシユするようです	33
ナム帰りの男が地獄を見せるようです	41
ナム帰りの男がナザリックの支配者と憩うようです	52
ナム帰りの男が冒険者としての一步を踏み出すようです	60
ナム帰りの男がカルネ村を訪ねるようです	68
キリングフィールド・ベトレイヤー	79
ニンジャ・ファイル・ア・デイープセンス・オブ・アイソレーション	87
ナム・クツキングタイム	94

ナム帰りの男がナザリック入りしたようです

「ふざけるなッ！」

BOOM！モモンガの降り下ろした拳が円卓にクリティカルヒットし、大きな打撃音を発する。

ここはナザリック地下大墳墓、円卓の間。ギルド長たるモモンガはギルドメンバーのへろへろを見送ったところである。モモンガの胸に渦巻くのは怒り、激しい怒り、失望、そして寂寥感だ。41人と後から加わった1人の42人が皆で造り上げ、成長させ、維持してきたナザリックではなかったのか！あの絆は！楽しかった思い出は！無価値な、省みる価値も無いものだったと言うのか!？

「ザツケンナカラー！」

モモンガがヤクザスラングを発する！コワイ！普段は温厚な人ほど怒るとコワイ、というのは江戸時代のレベリオンハイクである。普段温厚なモモンガが怒声を発する場面は、かつての仲間が見れば目を白黒させるであろう迫力があつた。

だがモモンガの怒りも長続きはしなかった。ユグドラシルのサービス終了まで残り時間は僅かに30分。その時だ！

「ジェロニモーツ！」

極めて米国空挺兵的なカラテシャウトと共に円卓の間の扉を蹴り開け、突入してきた者あり！

すわナザリックへの最後の挑戦者かと腰を浮かしたモモンガを襲ったのは、大きな喜びと懐かしさ、そして驚きであつた！

「ドーモ、モモンガさん。フォレスト・サワタリです。御無沙汰しています」

神器級編み笠に神器級の迷彩柄ボディアーマーにガントレット。腰にマウントする二刀のマチエーテはその銘をへサイゴンへホーチミンという。脇下の抜きやすい箇所にはナイフシースがあり、恐ろしい形状のククリナイフが納められている。そして背中には選び抜かれたバイオバンブーで作成されたタケヤリだ。余計な装飾を無くし、頑丈さ、貫通力、威力のパラメーターにデータクリスタルを突っ込ん

だ名品であるが、一見したところでは彼のベトコンぶりを強調する要素でしかなかった。

この珍妙なカラテシャウトと共に突入してきた男こそ、地獄のベトナム戦線妄想に囚われる恐るべきニンジャ…。のロールプレイを行うプレイヤー。フォレスト・サワタリである！

現実世界では暗黒メガコーポの雄、ヨロシサン製薬の末端研究員でしかない沢渡 森（サワタリ・シン）だが、このユグドラシルではナム妄想に囚われる狂気の半神的ニンジャ存在、フォレスト・サワタリなのだ！

「アイ… アイエツ!? ニンジャ? フォレスト!! サンナンデ!」

あまりに唐突なベトコンニンジャの登場に、さしものモモンガもNRS（ニンジャ・リアリティ・シヨック、一種の恐慌状態）に襲われる。なお、これはステータス上の恐慌ではなく、中の人の恐慌状態であることを明記しておく。アンデッドに精神的状態異常は存在しない！

「アイエエ… フォレスト!! サン! 来てくれたんですね!」

「この一年間、顔を出せずに申し訳ない。せつかくギルドに入れてもらったというのに…」

「いいんですよそんな! ユウジヨウ!」

「ユウジヨウ!」

お互いにサラリマンの身である。故に、ユウジヨウと言われればほぼ反射的にユウジヨウチャントを発してしまう。これが出来ないとムラハチと呼ばれる社会的リンチに会い、セプクは免れえない。だが、そこには確かなユウジヨウがあった。

「サヴァイバー・ドージョーの方は大丈夫なんですか?」

〈へ生き残り達が道場〉の輝かしいオスモウフォントのシヨドーが脳裏をよぎる。異形種PK全盛期の頃から異形種・亜人種・人間種を問わずに受け入れてきた集団だ。なお、ギルドではないため、ゲリラコマンド的活動が持ち味の集団としてユグドラシルでは広く知られていた。

唯一の拠点は、始まりの街に居を置くサワタリが、課金で拡張した

プレイヤーハウスを集会所兼ドージョーとしていたぐらいである。モモンガのもとを訪れるより前にドージョーの面々とは最後の別れを済ませていた。フロッグマン、ディスターブド、セントール、ディスカバリー、ハイドラ、ノトリアスなどなど。皆、最初に会った時は学生ばかりだったが、今となっては最年少のノトリアスですら社会人一年目だ。皆、リアルの都合もあるだろうに初心者だった頃にサワタリが面倒をみたプレイヤーが30人以上も挨拶に来てくれた。特にノトリアスなどはすっかり大人びていて、サワタリにはそれが嬉しかった。

このモモンガと出会ったのも、思えばPKの被害にあったハイドラのため、報復的作戦行動の最中だった。ちょうどハイドラを襲ったパーティーが骸骨の異形種を追い立てているところを、純銀の騎士とともにアンブツシュしたのだ。サワタリがアイサツするまでもなく、アンブツシュをくらった異形種PK者は爆発四散した。

「困っている人がいたら、助けるのは当たり前」「ベトコンは貴様が十全の力を発揮する暇など与えない、そして今の俺の精神はベトコンですら失禁する残酷さだ」

情け容赦ない四肢への攻撃からの局部破壊攻撃に、たちち・みーもドン引きしていた。

「ええ、ドージョーの方はアイサツも終えて畳んできました。それに今の俺はアインズ・ウール・ゴウンのフォレスト・サワタリですから」「そうですかーそれは良かったー!」

モモンガはニコニコとした笑顔のアイコンを頭上に表示した。ナザリックを忘却の彼方に追いやつていない、自分と同じようにナザリックを思う仲間がいることを本気で喜んでいるのだ。

「他の方は?」

「さっきまでへロへロサンがいらっしやってたんですけど、リアルがお忙しいようで...」

「あー」

リアルが忙しい。仕方がないことだ。サワタリとて明日もビジネス。サワタリの担当するバイオウエアは人工筋肉、このご時世、営業

も出来る研究職でなければ生き残っていけないのだ。メガコーポにとつて末端の研究員など羽虫も同然、容易にキリストの対象になりうる。一体何度ニンジャになりたいと思つたことか、自由・闘争・サヴァイヴを重点し超越者として竹林のタイガー（映像でしか見たことはないが）のように誇り高く生きていきたいと何度願つたことか。しかし、現実の沢渡はバイオウェアの人工筋肉を導入することで幾らか腕っぷしの強いだけの末端研究員だ。モルモットのようには使い潰され、ストリートに惨めな骸を晒す可能性が重点だ。

ヨロシサンに入れば、メガコーポに就職出来れば！ そんな望みは入社3ヶ月で擦りきれ消えた。理不尽に次ぐ理不尽。せめてゲームの世界では誇り高く自由でありたかつた。だから異形種PKは気に入らなかつた。仮に敵わないと思える相手にだって、チャドールとサイゴン・ロアで肉薄した。

「モモンガさんだって明日もビジネスでは？」

「あはは…… 実は明日も4時起きです。でも、最後ですから……」

「モツチャム！我が小隊も明日は0500より作戦行動に移る予定だ！」

ナムサン！このようなタイミングで〈狂気永続化〉発動の前兆だ！ サワタリは一連の特殊職業／種族ニンジャ取得イベントにおいて、リアルラックと課金の合わせ技をもつて、強大なグエン・ニンジャのソウルを宿すことに成功している。

だが、大概の強大なソウルにはデメリットというか、バッドステータスが付属している上に解除は不可能だ。それがニンジャという特殊なビルドがピーキーな性能を持つ一因でもあるのだが。

サワタリに発現したバッドステータスは〈狂気永続化〉、一切のチャットやメッセージが突発的に使用不可になり、使用しようとするとそのソウルの背景設定に応じて改変された発言が飛び出す。そして、魔法使用不可、バーサーク状態、フレンドリーファイアの解禁、精神異常無効化などが起きる。フォレスト・サワタリがベトコン妄想に囚われた狂気のニンジャロールを行うのもこれがあるからだ。

突発的とはいえ、今回のように一応は前兆が用意されている。

「あっはい。もう大丈夫なんですか？」

「ええ。今回は短かったので。」

突発的狂気だが、最長で一時間だったこともある。その時はるし★ふぁーに散々からかわれるフォレスト・サワタリの姿が有った。

「しかし設定魔のタブラⅡサンがデザインしたキャラなだけあって凄
い設定ですね。」

「…ちなみにビッチである」

「え？ … あっ本当だ。ギャップ萌えとは聞いてましたけどこ
れは」

「ちなみに俺は金髪で巨乳のヨメが欲しいです」

「アツハイ」

ブルシット！なんという大雑把な好みか！これでは凝り性ばかり
のこのギルドの男性陣に説教されるのもむべなるかな。

「ビッチである、って何か可哀想じゃないですか？このスタッフ・オ
ブ・アインズ・ウール・ゴウンが在れば書き換えられますけど、どう
でしょうか？」

「モモンガを愛している、で良いんじゃないですか」

「アイエツ!？」

「どうせ最後なんです。ヨメの一人や二人作ったっていいでしょう」

ナムサン！正気でも狂気でもこれでは大差ない。フォレスト・サワ
タリはそういう男だ！

「モモンガⅡサンが出来ないなら俺がその指を動かしてあげましよ
う」

そう言うとおもむろにフォレストはモモンガに飛び掛かった！

「え？アイエツ!？アイエエエエ!？ヤメロー！ヤメロー！」

「本当にモモンガを愛しているにしてみました…」

「まあまあ。良いじゃないですか。タブラⅡサンも娘にムコが出来て喜んでますよ。ダイジョブダッテ！」

「全くとんでもない人だ…」

「モツチャム！まあ、狂気のニンジャ存在なんで。地獄の密林ではよくあることですよ」

「ははは…でもフォレストⅡサン、今日は来てくれて本当にありがとうございました。俺、嬉しかったです」

「こちらこそ本当にありがとうございました。それに寂しい思いをさせてしまったてすみません。」

「そんなことは…」

現実世界のモモンガは既に涙をこぼしている。ひとりじゃない。自分はひとりではなかった。思い出を共有してくれる仲間がいる。それが堪らなく嬉しかった。

「たっちⅡサンが引退するとき、入れ替わりに私がギルドに入ったとき、モモンガⅡサンとナザリックをよろしくって、そう言われてたんです。あの時以来の付き合いだから…」

「そうだったんですか…」

サワタリもモモンガももう涙が止まらない！おお、ユウジョウに包まれてあれ！

しかし時刻は23:57:53

別れの時は間もなくだ。

「モモンガⅡサン！本当にありがとう！楽しかった！いくら現実が辛くてもマップポールの世の中でも、ユグドラシルでは忘れられた！本当に…楽しかったんだ」

「俺も…俺もですよフォレストⅡサン…また、また何処かで会いましょう！きつと！」

23:59:35

「じゃあ次会うときはユグドラシルⅡがリリースされたらですね。カ

ラダニキヲツケテネ！」

23 : 59 : 58

23 : 59 : 59

00 : 00 : 01

「あれ？」

「モツチャム？」

ナム帰りの男が異世界入りしたようです

「モモンガさん、現在時刻は？」

「0時を過ぎています。変ですね。」

おお、一体どうした事だろうか！先ほど涙の別れを済ませた二人の男が未だにナザリックの玉座の間にいる。システムトラブルだろうか。

「コンソールが表示されません。これは本格的にシステムトラブルの可能性が重点ですよ」

「フウム。HQとも通信途絶となると、これはベトコンどもがよく使う手口だ！直に襲撃があるかもしれないな」

ナム妄想だ！瞬く間にサワタリの周囲が豪華絢爛な玉座の間から東南アジア風民家の景色に変わっていく。強力な重火器を装備した骸骨が迷彩服にヘルメット姿で椅子に座っている。彼は機関銃手だった。現時点では小隊に彼より上位の指揮官がいないため、モモンガが小隊長だ。自身はポイントマンなので実際軽装だ。

部隊は激しく損耗し、戦力は極めて僅か。有力な敵部隊に包囲されHQとの通信は途絶。そして保護すべき民間人もいる。しかも友人の娘だ。ベトコンどもに捕まればどうなるかなど、最早分かりきっている以上は如何に不利な戦況であっても戦わねばなるまい！サイゴン・ロアだ！

「モモンガさん！どうする。これは一刻を争う事態だぞ。」

「どうかなさいましたか？モモンガ様、フォレスト・サワタリ様」

涼やかな声である。サワタリは民間人特有の現実逃避と受け止めたが、モモンガは驚愕のあまり硬直した。

(アルベドが、NPCが話している…!?ナンデ!?)

「そして後れ馳せながら、フォレスト・サワタリ様。ナザリックへ御帰還いただき誠に恐悦至極にございます。フォレスト・サワタリ様が自由と闘争を旨とする御方だとは存じ上げますが、どうか、どうか私共シモベにお仕えさせてくださいませ。先ほどモモンガ様と別れのアイサツを交わしていたことを知りながら、不躰なことでござい

ますが、どうか伏してお願い申し上げます」

アルベドの声にサワタリは現実には引き戻された。アルベドも、そしてセバスもまたすがるような瞳でサワタリを見つめている。むしろたち・みーに創造され、返事も返ってこないNPCの頃から頻繁にアイサツしていたセバスの方が、その頃の記憶まで在るのか強くすがるとような瞳であった。

「元よりドージョーを解散した今、ナザリックだけが俺の家だ。アルベドさん、セバスさん、モモンガさん、モモンガさんを支えてくれた！俺は友人の残した子供たちを置いて消え失せるような事はせん！」

「なんと、なんと勿体無い御言葉…セバス、良かったわね…」

アルベドの瞳からセバスの瞳から涙がこぼれ落ちる。

「フォレスト様…無事の御帰還、このセバス何と申し上げて良いやら…」

「良い良い！それより今は非常時だ！俺を温かく迎えてくれたナザリックとモモンガさんの為に一働きしようではないか！偵察に出るぞ！俺に続け！」

「ハッ！」

モモンガも思わず涙ぐんでしまう再会劇だったが、モモンガが涙ぐんでいる間に二人は色の付いた風と化し、行ってしまった。

「行ってしまったか。まあいい。どのみち周囲の様子は確認してきてもらうつもりだったし」

（フォレストさんは流石に普段からロールプレイしているだけあって振る舞いが堂に入ったもんだよなーワザマエ！）

（でもこんな訳のわからない事になっている状態でも狂気永続化は継続しているのだろうか）

「モモンガ様。私はいかがいたしましたでしょうか？」

「アルベドは…そうだな。私のもとに来てくれ。」

「承知いたしました。これでよろしいでしょうか。」

玉座に座るモモンガに対して正面から膝立になり、半ばしなだれかかるような姿勢のアルベド。そのバストは実際豊満だった。その実際豊満なバストがモモンガのローブに覆われた膝あたりの骨に圧迫

されたことによつてスライムめいて形を変えてゆく！これでは青少年のなんかが実際アブナイし垢BANされてしまうぞ!?倫理コード抵触不可避のエイティーン・アブナイな感触によつて、モモンガもこはユグドラシル内ではないのでは？という疑念を深めていく。

だが、そんなことよりも先ずは目の前の豊満をもつてユグドラシル内ではないことの確信を得ねばならない。モモンガは決断的に発言した。

「触るぞ」

「あつ・・・」

不意にタオヤメめいてきわめてセクシーかつアトラクティブな声を出すアルベドに、モモンガもどきりとするが、あくまで決断的にアルベドの豊満をもみしだいた。おお、なんとという背徳的光景か！骸骨がサキュバスのバストを死神めいてもみしだいているのだ！しかも実際ネガティブ・タッチによつてダメージがはいつている！だが、だれも止める者はいない！

「心臓の鼓動を感じるぞ、アルベド。お前たちは生きていて、そしてここにいるのだな。今も私の傍に」

非常に背徳的な光景ではあるが、モモンガから発された声は驚くほど優しく、また、今にも泣きだしそうなアトモスフィアを漂わせていた。

ただでさえ、モモンガを愛しているという設定が追加されたためにブーストされているアルベドの母性（モモンガ専用）は一瞬にして打ち抜かれた。キャバーン！衝動的に自分の両手でもつてさらに強くモモンガの手を豊満なバストに押し付ける。ダメージ増量！だが愛の前には無意味だ！愛とはためらわれないこと、というのは平安時代の宇宙刑事の遺したコトワザである！アルベドの瞳から熱い雫が落ちる。それは美しいカンバセを伝い、豊満なバストへと落ちていく。まさしく母性である。

「モモンガ様の御身の傍に。アルベドはいつでも、そしていつまでもモモンガ様のお側におります。モモンガ様さえお求めになるのでしたら、このような事も、またそれ以上のことも・・・」

モモンガの胸にアンデッドらしからぬ暖かななにかが込み上げてくる。アインズ・ウール・ゴウンは決して過去の遺物などではない。皆の思いの結晶はここにあるのだ。しかしモモンガの手は現在も豊満マツサージ継続重点である。

「ああつ・・・アルベドは、アルベドはもう辛抱たまりません！くふー！」

アルベドはモモンガにしなだれかかる面積を広げ、モモンガの大腿部頬ずりしている！これ以上は本当に青少年の何かがアブナイだぞ！？

「お、おお、落ち着けアルベド！落ち着くのだ！今は緊急事態だ。それに・・・こんなコトワザがある。お楽しみは後にとっておくと実際三倍タノシイ、とな」

「なんと含蓄に満ちた言葉なのでしょうか・・・さすがはわたくしの愛しいお方。待つ時間も楽しみみの内ということなのです！浅はかにも一時の感情、あともすふいあに身を任せましたこと、どうかお許しくださいませ」

何とか危機を回避したモモンガではあるが内心ではかなり危険な状態であった！

（本当に好感度マックスじゃないですか、フォレストⅡサン！まずいですよコレは！だけど早く次の一手を打たなくては・・・NPC達に失望されでもしたらセブクじゃすまないぞ・・・）

と、その時！モモンガがひかる！ひかる！これはアンデッド等の異形種に特有の、精神異常の無効化や高揚を抑制するスキルが発動したことを示している。

「・・・ふう。アルベドよ、お前はギルド内の各階層守護者に連絡し、六階層の闘技場に集合するよう伝えよ。また、プレアデス達も九階層に上げて侵入者を警戒させよ。彼女らを上手く使え」

「はっ！」

「見事な大草原だな、セバスIIサン？」

「フォレスト・サワタリ様の仰る通り、見渡す限りの草原ですな」

所変わって、地上に出たセバスとサワタリは見渡す限りの草原に目を丸くしていた。少なくともサワタリについてはゲームの外で自然に触れるのは初めてのため、目を真ん丸にしていた。

「少し歩くか…サイゴン！」

背にマウントしていたタケヤリ（ディエンビエンフー）を油断なく構え、前進する。

セバスは一見すると、自然体でサワタリについて行っているように見えるが、実際のところチャドー呼吸によって一度事が起こればサワタリの邪魔にならないように且つ盾になれる体勢を維持していた。自我を持ったことでNPCの戦闘力は1.5倍にもなっているのだ！

星明かりの下を二人の男が歩く。おもむろにサワタリは立ち止まるとアイテムストレージから念写機を取り出して何枚かの写真を撮影した。

「フォレスト・サワタリ様、それは一体？」

「うむ。口頭だけでは伝わらないこともあるかと思ってな。こうして、適当な白紙をセットしてこうする。すると…こうだ！」

「これは…ナザリックを背に私が写っておりますね。なるほど、これは大変に分かりやすい。お見事でございます」

ポラロイドめいて吐き出された写真には、セバスがナザリックと満天の星空を背に写っている。そのまま何枚か撮影を続けると満足したのか、サワタリは写真をアイテムストレージに放り込んだ。

「セバスIIサン、記念に一枚撮らんか。ナザリックとこの宝石箱めいた星空を背に。」

サワタリの言葉にセバスは激しく動揺した。先ほどの再開からセバスの心は揺さぶられ続けている。喜び、驚き、そしてサワタリもま

た他の至高の御方と同じようにナザリツクを去った、と一度でも考え
てしまっていた浅はかさへの後悔。

「私などがフォレスト・サワタリ様とご一緒してもよろしいのです
か…?」

「お前が良いんだ、セバス。俺は、たっちⅡサンがお前をデザインして
いた頃からお前を知っている。つまりセバスは戦友の息子も同然！
分かるな？」

「はい…！はい…！」

セバスは思わず大粒の涙を流した。

（この気高く慈悲深い御方により一層の忠誠を誓おう…！二度とこ
の御方を疑うような真似はするまい…！）

結果としては、端から見れば、ベトコンと執事と大墳墓という珍奇
な組み合わせだが、本人達にとってはかなり満足のいく出来映えの写
真が撮れたようだった。

「さて、そろそろ戻…サイゴン！」

しみりしたアトモスフィアをぶち壊しにするが如きサワタリの
カラテシャウト！しかもタケヤリ（ディエンビエン）は地面を深
く突き刺している！ついに完全な発狂マニアックになってしまっ
たのか!?

「フォレスト・サワタリ様、いかがなさいましたか。」

無言でクレーターめいて抉れた地面から、慎重に（ディエンビエン
）の穂先を抜き取ると、そこには中々の大きさのモグラが絶命し
ていた。これはセバスにも関知出来ないほどの小さな気配を、サワタ
リが見逃さなかった証左である。

「フウーム。一見するとモグラだが、な。食せば分かるか」

これに慌てたのがセバスである。

「フォレスト・サワタリ様！どうかお止めになってくださいませ。貴
き御方には、貴き御方の召し上がるべき食物の格というものがござい
ましょう。」

するとサワタリは最先任上級曹長めいた顔つきで答えた。

「地獄のナムでは食える時に食わない奴から体力を失い、死んでいった。それになセバスⅡサン、何かを他人任せにすればした分だけ何か、いや野伏力が鈍るんだ。勿論ナザリツク的美食を味わうのも悪くはないんだが、な」

なんとという凄みか！到底ただのナム妄想由来の理屈とは思えぬ！

（この御方は脆弱な人の身を極限まで鍛え上げ、試練を越えて、遂には半神的ニンジャ存在にまで成った御方！これが常在戦場の心構えであり、モモンガ様の懐刀として己を律する在り方か：：！何と凄絶な！）

なおサワタリは料理スキルを使用してモグラを食べてみたいだけだ！ナムサン！

「私が間違っております。申し訳ございません」

「良い良い。遠慮せずにセバスも食すのだぞ！」

セバスが尊敬の念を深めている間に、サワタリはモグラの皮を剥ぎ、臓物やらを抜き取り、離れた場所でモグラ肉を高速で振り回してエンシンブンリ・チヌキを行い、スキットルの火酒でモグラ肉を洗い、円匙で穴を掘ってササの葉で包んだモグラ肉を埋め、その穴の中に火をおこしていた。

この間、僅かに5秒！これは実際、老練なマスターイタマエクラスの身のこなしである！無論サワタリはイタマエではなくニンジャである！

「こうして穴を掘ってから火を起こすと、遠くからはあまり目立たないですむのだ。セバスⅡサンも覚えておけ」

「はっ！しかし、フォレスト・サワタリ様の実戦的知恵の豊富さには心底感服いたしますな。」

「大したことではない。それと、俺のことをそんな他人行儀に呼ぶな。フォレストⅡサンと呼んでみる。」

セバスは目に見えて硬直！ギリシャ彫刻石像めいて沈黙だ！

「セバス？」

「フォ：： フォ：： フォレ、フォレストⅡサ、様。これ以上はお許し下

さい！」

セバスの頬は精神の高揚を示すが如く紅く染まっている。どう見ても焚き火のせいではないぞ！

モグラの包み焼きに粗塩をぶっかけて食した二人であったが、存外な滋味に二人は、特にサワタリはモツチャム、モツチャムと言いながら喜んだ。

(これは、良いものだ…)

何に対してなのか、どちらの心の声なのか、それは分からないが、モングからの〈伝言〉を合図にナザリックへと帰還するのであった。

ナム帰りの男が忠誠を捧げられるようです

「〈獄炎〉イヤーツ!... 完璧だ!」

スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの効果によって強化された地獄の炎が、藁人形を一片も残さず消滅させる。

(これで魔法は使えることが分かった... そしてアウラとマーレへの実力アツピールも問題無いだろう)

「おおーっ! 流石ですモモンガ様! まだ藁人形はご利用になられますか?」

「いや、それには及ばない」

「〈伝言〉... セバス、聞こえるか?」

「これはモモンガ様、いかがいたしましたか」

セバスには〈伝言〉が通じたことで若干安心したモモンガだったが、問題は他のギルドメンバーの反応が無かったことだ。ナム妄想のサワタリは仕方ないのでともかくとしても、他のメンバーから反応が無いとなると、やはり寂しく思わずにはいられない。

これでもしも自分一人だけだったらと考えると、背筋に名状しがたい悪寒が走った。

(想像するだに恐ろしいな。本当に一人じゃなくて良かった...)

「周囲の様子はどうか?」

「全く見渡す限りの草原です」

「沼地ではなく、草原なのか?」

「はい。はっ... フォレスト様が写真を撮影したので後程それを御覧にいれる、と仰せです」

(となるとここはユグドラシルのゲーム内ですらないのか? 幸いフォレストサンが写真を撮ったというんだから、それを見てから判断しよう)

「さて、次だ。〈召喚〉!」

モモンガの号令と共に、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンからレベル80相当の火精霊が出現する。どうやら魔法周りについては完全に使用することが可能のようだった。

「アウラ、マーレ、良かったらこいつと戦って見ないか？」

どこことなく悪戯っぽいアトモスフィアを漂わせながらモモンガが問うと、アウラが喜色満面でこれに応えた。

「ハイヨロコンデー！」

一方弟のマーレ、実際太股部分を核心とする絶対領域が瑞々しいが、弟、男の娘というジャンルのキャラクターだが、マーレは乗り気ではないようだ。

「僕はちよつと遠慮させ」いいから早くこつち来て戦うの！早く！」そんなあゝ」

姉に襟を掴まれて引き摺られていく、実際カワイイな光景が展開された。

カワイイな姉弟であったが、戦いぶりについてはレベル差も相まって火精霊を相手に危なげ無い戦いを展開し、順当に大きなダメージを負うこともなく勝利した。

「二人とも見事であったぞ。」

水差しから注いだ冷水を二人に渡し、戦いぶりを褒めるモモンガだったが、ここで新たな事実が判明する。

「こんなに激しく動いたのは久しぶりなので楽しかったです！：：あ、でもまたフォレスト・サワタリ様に模擬戦に付き合ってもらいたらなあゝ」

(そういえば茶釜Ⅱサンに頼まれて、よくフォレストⅡサンが戦闘時のAI組むためのアグレッサー引き受けてたっけ：：)

(ということは、NPCはゲーム時代の事を覚えているのか?)

「お前達はフォレストⅡサンが模擬戦の相手をしてくれていた事を覚えていいるのか？」

反応は激烈だった。

「あつたりまえですよ！その時はまだ至高の御方ではありませんでしたが、それでもぶくぶく茶釜様の御友人！その上、たち・みー様に引けをとらない戦士である御方から教えを頂いておいて、覚えていなかったりしたら恩知らずの極みです！」

「そ、そうか。そうだな。マーレも同じか？」

「は、はいモモンガ様。僕もお姉ちゃんと一緒にぶくぶく茶釜様の見ている前で、ご指導頂きました。」

「なるほど。よくわかった、二人ともありがとうございます。模擬戦については私からフォレストⅡサンに伝えておこう」

「本当ですかっ？ありがとうございます、モモンガ様…。ってことはフォレスト・サワタリ様御帰還ヤッター！ぶいっ！」

「ええっ！フォレスト・サワタリ様がお戻りなんですか!?!良かったね、お姉ちゃん！」

「ヤッター！ヤッター！」

(これでNPCがゲーム中のことを覚えているということがハッキリしたな。そして、PvPについてユグドラシル中で三本の指に入る強さであるたっちⅡサンと比べて、十本の指には入るがたっちⅡサンには敵わないと自認していたフォレストⅡサンの強さをアウラは引けをとらないと評した。こういう細かいところからNPC達の認識を知らなくては)

「あら、わたくしが一番でありんすか？」

血に狂う美少女真祖吸血鬼、第一〜第三階層守護者シャルティアのエントリーだ！

「なんだか焦げ臭いでありんすねえ…。ああら我が君、我が愛しの君。ご機嫌麗しゆう存じんす。」

瞬時に間合いをつめると、モモンガに熱烈なハグ！胸にも何かがつまっている！胸が異様だ！

「… 偽乳」

アウラが鋭い一言を呟く！まるで切れたナイフだ！

「テメツコラ、アウラテメツコラー！モモンガ様の御前で何てことオラーツアリンス！」

コワイ！オイラン・ヤクザスラングだ！

「何よ変な盛り方しちやってさ！一目瞭然でしょー？」

ヤナギめいて受け流すアウラにシャルティアは更なるヤクザスラングを繰り出す！

「ダマツコラーチビスケ！あんたなんか無乳でしょ！」

「私は将来性バツグンだもんね、それにフォレスト・サワタリ様も酔ってらっしゃった時に金髪エルフ元氣娘と激しく前後したいっておっしゃったもんね！どちらが優れてるかは明白でしょ！」

（おいおい、それリアルが忘年会だった日にフォレストⅡサンが酔っ払ったままログインしてきて女性陣にボコボコにされたインシデントだろオ!?そんな事も覚えてるのかよ！）

「アンデッドは実際ノーフューチャーだもんね？本当大変、満足すること覚えたら如何であ・り・ん・す？」

「ザツケンナコラ、チビスケツコラー！待てコラー！」

「走ると胸が行方不明になっちゃうよ？」

「んのお!？」

「サワガシイ！御方ノ前デ遊ビスギダゾ：： 失礼デアロウ」

第五階層守護者、甲冑めいた蟲王にして、氷河の支配者コキユートスのエントリーだ！

「このチビスケが！」「実際パッド重点な！」

シャルティアとアウラの掛け合いはモモンガにペロロンチーノとぶくぶく茶釜のやり取りを思い出させ、実際微笑ましかったが、話が進まなくなると困るのでコキユートスの登場はモモンガにとって良いタイミングであった。

「やれやれ、皆、揃っているようですね。モモンガ様、御待たせして申し訳ありません」

第七階層守護者、炎獄の造物主デミウルゴスと守護者統括アルベドのエントリーだ！

「良い、許す」

「では、モモンガ様。フォレスト・サワタリ様がお戻りになられましたら忠誠の儀を執り行いたいと存じますが、よろしいでしょうか？」

アルベドの発言にモモンガが領きを返す。すると丁度良くセバスを連れてフォレストが、円形闘技場に姿を見せた。

「アイエツ!?フォレスト・サワタリ様御帰還ヤッター!」

「ヤッター!ヤッター!」「お姉ちゃん良かったね!えと、僕も嬉しいです!ヤッター!」

「オオオ... ナント慈悲深キ至高ノ御方、ヤハリ我ヲヲオ見捨テニナツタワケデハナカツタノダナ... ウオオオ!」

「アルベドっ!?貴女はこの事を知っていて黙っていたのですか!フォレスト・サワタリ様の御帰還という一大事を!」

「モモンガ様のご意志よ、デミウルゴス」

(え、俺?)

「モモンガ様の...なるほど、そういう事ですか。」

(どういう事?俺にも教えてくれデミウルゴス!)

「フォレスト・サワタリ様の御帰還を全ナザリックに知らしめる第一歩として、先ずは我らを集め、その忠誠を確認した上で、モモンガ様が懐刀たるフォレスト・サワタリ様を迎え入れ、このナザリックに支配者として今までよりも一層強大に君臨なさることを宣言なさるおつもりだったのですね!」

(アイエ!?支配者ロール強制重点な!)

「うむ、流石二人は私の考えを正確に読み取ってくれるか。私は嬉しく思うぞ。」

「勿体無き御言葉にございます」

「愛しい御方の思いに添えるよう、今後も精進いたします」

「うむ。では、皆、フォレストⅡサンの帰還が嬉しいのは分かるが静粛にな。今からフォレストⅡサンの帰還の挨拶の後、セバスが地上偵察の結果を話す。フォレストⅡサン、頼む」

(よし、これで一旦はフォレストⅡサンに注目が移るぞ...ガンバロ!)

「ドーモ、ナザリックの皆さん。アインズ・ウール・ゴウンのフォレスト・サワタリです!実際ご無沙汰しています!」

サワタリが自身の口で自分の所属をはっきりと口にしたことで、守

護者達は涙をこらえることが出来なくなった。

自分たちは見捨てられた訳ではなかった。モモンガ様と志を同じくするあの御方が我らを見捨てるはずもなかった。最後まで残ってくださった、仕える喜びを与えて下さった御二人に深き海より深く、どのような霊峰よりも高い忠誠を捧げよう！至高の中の至高の御方々に忠誠を！アインズ・ウール・ゴウン万歳！

ナムアミダブツ！しゃくりあげる音が、守護者達の純粋な忠誠心がサワタリを追いつめ、ナム妄想に追い込む！

ここは地獄のナムの前線基地。比較的安全とはいえ、いつベトコンの自爆攻撃があってもおかしくない場所だ。

モモンガ連隊長が目線でサワタリに発言を促す。連隊長に敬礼、そして正面に敬礼。その後ろ姿をセバスはじっと見ている。

「全体気を付けエツ！休め！」

サワタリの発する大音声が闘技場全体に響き渡り、守護者達は弾かれたように頭を上げ背筋を正し、サワタリを見詰める。ついでにモモンガも弾かれたように頭を上げ背筋を正し、サワタリを見詰める。一目でナム妄想に囚われているのが分かるので気が気ではない！

「諸君！私とモモンガⅡサンの何よりの宝であり、我々42人の想いの結晶たる諸君！我々はこれから、モモンガⅡサンの下に一丸となつて大事にあたらねばならない。」

であるのにも関わらずッ！その腑抜けたツラは何だアッ！

良いか、俺と肩を並べる戦士たる諸君は！自信に満ちた不敵な面構えでなくてはならない！

自分に自信を持って！かくあれと創られた自分と忠義に自信を持って！俺とモモンガⅡサンはお前達の全てを許そう！

そして、俺の帰還等という些事に涙を流すのではなく！

アインズ・ウール・ゴウンの栄光をかけて挑むに値する大事に！不敵に笑いかけようではないか！そして再び共に戦おう！」

もはや号泣し、叫びを上げることが耐えていない者はいない！モモンガなど三回はひかっている！そして誰もが号泣しながらも、下唇を

噛み締めながらも前を向いてフォレストを見ている。フォレストの話聴き、至高の42人の櫛の歯が欠けたような状況に対して、弱気になり懦弱になっていた自身を見出だしていた。

モモンガは実際のところ不安に思っていた。自分は現実に戻る価値を見出だせない人間だが、フォレスト・サワタリという男は違うのではないか？

この人は、この男は、いや、この男もまた、皆のように現実に戻るために自分のもことから、ナザリックのもとから去っていつてしまうのではないか？

だってフォレストⅡサンのニンジャ野伏力があれば一人でもやっていけるんじゃないか。そしたら現実に戻るためにナザリックを離れて二度と戻ってこないんじゃないか。フォレストⅡサンにはそれを成し遂げる力が在るんだから。

それにフォレストⅡサンは仮にもヨロシサン。メガコーポのサラリマンならリアルに立場も地位も在るだろう。

だって皆リアルが在るんだもの。仕方ない。仕方ない。仕方ない。仕方ない。仕方ない。仕方ない。仕方ない。仕方ない。

皆で作ったナザリックだろ？簡単に捨てないでくれよ！ここにいてくれよ！また冒険しよう！楽しい思い出を作ろう！俺を一人にしないでくれよ！

そんな思いが全部吹き飛んだ。沢渡森はフォレスト・サワタリになる気ている。狂気に身を任せても自分という友達と一蓮托生の覚悟でいるということが伝わってきたからだ。

何だかようやくく頭の霧が晴れて、この不思議な世界での冒険を楽しめそうな、そんな気がした。

「では、まず皆様にお配りした写真を御覧ください。これはフォレスト様の撮影された御写真です。私の記憶では、ナザリック地下大墳墓

は毒の沼地に囲まれていたように思います。が、現在地は草原が広がっています。」

先ほどのフォレストの話から十分が経過していた。その場の全員が落ち着き、喉の渇きを癒す時間が必要だった。

演説ぶちかましておきながら、今さら恐縮しているフォレストにモモンガは無限の水差しから水を注いで渡してやった。他の階層守護者達にもモモンガは手ずから水を注いで渡していた。

「人工的な建造物や知的生命体も見当たらなかったか？」

「はい。あ、いえモグラは……おりました、いただきましたが、他には生物の姿も特には。」

「モツチャム！ 実際美味かったぞ！ 今度モモンガさんにも食べさせて…… やりたかったが難しいな」

このセリフにアルベドとデミウルゴスは小さな悲鳴をあげた後、セバスの言葉の意味に気付いたのかジト目でセバスを見ている。

「そうか。しかし、写真によるならば本当に見晴らしの良い草原が見渡す限り、といった具合だな。よろしい。アルベド！」

「はっ！ それでは我らが忠誠を至高の御方々に捧げます。皆、忠誠の儀を」

「第一、第二、第三階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン、御身の前に」

「第五階層守護者コキユートス、御身ノ前ニ」

「第六階層守護者アウラ・ベラ・フィオーラ、御身の前に」

「おっ、同じく第六階層守護者マーレ・ペロ・フィオーレ、御身の前に」

「第七階層守護者デミウルゴス、御身の前に……」

「守護者統括アルベド、御身の前に。第四階層守護者ガルガンチュア及び、第八階層守護者ヴィクティムを除き、各階層守護者御身の前に平伏し奉る」

「御命令を、至高なる御方々。我らの忠義全てを御二人に捧げます」

「素晴らしいな...」

「どうやら俺は、死の超越者になってしまったみたいだが、少なくとも一人ではないらしい。」

ナム帰りの男が世界征服を夢見るようです

「アイエエエ・・・疲れましたねフォレストⅡサン？」

「そうですね、モモンガⅡサン。だが、実際俺はナムで地獄を見ているからな。部隊員との良好な関係を構築するのはサヴァイブに必須だ。モモンガⅡサンも何度かひかっていたが大丈夫か？」

ここは第九層のモモンガの私室だ。ニンジャと骸骨は一通りの指示を出し終えて、今は安全に憩っているところであった。しかし気掛かりなのはサワタリのナム狂気表出頻度が、ゲーム中よりも明らかに高く、持続時間が長い傾向にあることだ。

「フォレストⅡサン、私たちだけの時はロールは無しでいきましょう。このままじゃ本当にサワタリⅡサンが狂気のニンジャ存在になつてしまいそうで・・・」

サワタリは一瞬驚いたような表情をしたが、すぐに笑顔を見せた。

「デスネー モモンガⅡサンも精神疲労はあるでしょうから、フートンに横になったりして憩ったほうが良いですよ！ユウジョウ！」

「でも折角だしナザリックの外にも冒険行きたいですね」

「いいですね冒険！見たことないアイテムやモンスター、食物が俺とモモンガⅡサンを待ってますよ！」

「ははは・・・でもまずは情報収集からですよ？いつもみたいに一人で突っ込んでいったら駄目ですからね？」

「アツハイ」

実際モモンガは安全面という意味ではさほどサワタリのことを心配してはいなかった。サワタリのPVPでの勝率は高く、公式武術トーナメントでワールドチャンピオンを逃したのは、同じワールドに例のリアルで格闘技世界チャンピオンで実際チャンピオンなあの男がいたからだ。サワタリ曰く、あの男とたちⅡサンには10回やっても1回も勝てない可能性が重点だが、そのほかのワールドチャンピオン相手なら勝ちの目は有ることだった。

なので独断先行を止めた理由は、折角リアルのくびきから自由に

なったのだから一緒に楽しみたいという、見方によってはカワイイな理由であった。

「しかし、階層守護者達からの評価が凄かったですね。私ビックリしてひかりましたもん」

「あー… 絶対なる支配者で、慈悲深く賢明で、行動力もあって、アルベドⅡサンの恋人でしたっけ」

「大体そんな感じですけど、アルベドに関してはフォレストⅡサンのせいじゃないですかア！」

「支配者なんだからヨメの一人や二人いてもダイジョブダツテ！」

サムズアップ！テンションの高い、ハリウッドムービーに出てくるアメリカンめいたサムズアップにモモンガの堪忍袋はばくはつした。

「イヤーツー！」「グワーツー！」

軽装とはいえ、前衛のサワタリにダメージが入るわけではないので、これは実際じゃれあいだ。

「それに、フォレストⅡサンだって凄い評価だったじゃないですか！… 超越的強者デアリ、後進ノ育成ニモ力ヲ注グ偉大ナ戦士デアルカト。とか言われてたじゃないですか！」

「スイマセン、あんまりソクケイされたり忠誠されると緊張してナム発作が起きるんで勘弁してください」

「アツハイ」

何か事が起きれば、モモンガⅡサンと仲間達の残したナザリックの皆を守護らねばならない。そのプレッシャーが重くのし掛かる。

リアルでも、ヨロシサン末端研究職だったサワタリは日常的にセプク・オア・グローリーめいた状況に置かれていたが、その時はユグドラシルで現実逃避が出来た。

今は自由になったかわりに、責任が100倍だ。そのプレッシャーに耐えられなくなった時、サワタリは偽りのベトナム戦争の記憶に支配され、ナムの狂気に陥るのだ！

「そういうえば、狂気永続化が継続しているのは分かりましたけど、他のスキルなんかはどうですか？」

「そうですね… もともと私は軽装かつ最前衛で、トラバサミとフド

ウカナシバリ・ジツ由来の石化で敵の足を止めて、ダブル・イアイドとカラテで削り殺す戦法をとっていましたよね。アンブツシユから出来る限り乱戦に持ち込んだりして。」

「ハイ。」

「この腕や首のへびめいた鱗や身体の柔軟性を見る限り、コブラ・ニンジャクランを選択したことは生きています。つまりフドウカナシバリ・ジツは使えます。そして、身体能力も凄まじいです。リアルではバイオウエアを身体に入れていたんですが、今のニンジャ身体能力に比べたらゴミ同然ですね。デメリットである、カラテシャウト無しだと攻撃威力半減も確認しているので、ほぼユグドラシル内と変わらない感覚で戦えるでしょう」

実際ニンジャと非ニンジャにはそれほどの身体能力の差がある！強力なニンジャであれば、高速で射出された銃弾をつまみとり、瞬時に投げ返すことも可能なのだ！

「なるほど。私も魔法は使えましたが、それなら問題は無さそうですね。後は外の種族が200レベルとかじゃなければいいんですが…」

「そしたらもうワールドアイテム使うしかありませんね」

「それもそうだ。心配しても仕方ないことでした」

「ところでフォレストⅡサン、地上は如何でした？写真ではかなり見事な星空に見渡す限りの草原でしたが」

モモンガが小首を傾げながら問う。ギャップモエだ！

「そうそう、外スゴインですよ外！満天の星空にケミカル臭のしない空気、見渡す限りの草原に見事な自然！うまいモグラ！実際最高でした！」

「そんなにですか？わあー、なんか私も行きたくなくなってきましたよ外！今から行きませんか？…いや、行きましようー！」

手をバタバタふりながら目を常よりもいっそう赤くひからせる骸骨！コワイー！そしてひかる！

「ああー沈静化されました…」

「あー精神的な状態異常の無効化ですか」

ガツクリと肩を落とすモモンガの背中では実際煤けてみえる。

「まあ、気を取り直して外行きましょうよ。ネ？」

「そうですね！じゃあリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで一階層に転移ってことで」

「ヨロコソデー」

「さあ、やって来ましたよ第一階層。そして何故デミウルゴスが居るんだらうか」

「デスネー」

二人の視線の先には何故か親衛隊を引き連れたデミウルゴスが居る。なんか近寄りたいたので脇をこそそと移動していたモモンガとサワタリだったが、隠密スキルや隠密ボーナスをモモンガが持つていないためあっさり知覚された。

「モモンガ様。近衛も連れずに一体何事ですか？」

「アイエ…これはだな」

BOON！そこにスニーク状態を解除したフォレスト・サワタリがエントリーだ！

「護衛ならば俺がいる。モモンガさんには指一本触れさせん」

「アイエツ?!これはこれは、フォレスト・サワタリ様もお出でとは。地表部に御用でしょうか？」

「そうだ。やはり一度は自分の目で確かめないことにはな。それと、任務中のマールレの陣中見舞いに行くのだ」

すかさずモモンガが援護射撃めいて答える！

「左様でございますか。でしたら、私もお供いたします」

「う、うむ。御苦労」

「シモベとして当然の事でございます」

(あー、これじゃ支配者ロール重点ではしゃいだりは出来ないかな)

モモンガは〈飛行〉の呪文で、デミウルゴスは自らの翼で、フォレスト・サワタリは飛行の首飾りを装備し、それぞれがそれぞれの方法でもって空へと上がる。

「素晴らしいな…。」

満天の星空で、空気は実際澄みわたる。現実世界ではもはや地上のどこからも観ることが叶わない景色を、今は三人で独占している。俺と、フォレストⅡサンと、デミウルゴス(ウルベルトⅡサン)。

素晴らしいという他なかった。

「モモンガⅡサン! きつきも思ったんだが、これは実際宝石箱だな!」

フォレストは飛行のもたらす不思議な浮遊感を心底楽しんでいるかのような声で言った。

「宝石箱… そうですね。ブループラネットⅡサンにも見せてあげたいなあ…。」

「モモンガ様、フォレスト・サワタリ様。御許可さえ頂けるのであれば、ナザリック全軍をもつて、この宝石箱のすべてを手に入れてまいります」

モモンガは空に向かって力強く拳を握り締めた。

「世界征服なんて、良いかもしれない!」

モモンガが握り拳をサワタリに向ける。

「ハイコロコンデー!」

サワタリは力強く、モモンガと握り拳を打ち合わせた。

「!」

Z D O O M! マーレの地形改造作業音か! 既にナザリック周辺には幾つかの丘ができ、ナザリックの姿を隠している。

「マーレ、ナザリックの隠蔽作業は順調か?」

「ももも、モモンガ様!?! ようこそおいでいただきますっ…!」

思わぬタイミングでの視察にマーレはしめやかに失禁… はしないがギリシャ彫刻スタチューめいて硬直した。

「そう固くなるな。お前に任せた仕事は非常に重要な事だ。故に、お前の働きに対して私がどれだけ満足しているか知ってもらいたい。

褒美だ」

モモンガが取り出したるはリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンだ！

「それは！このような至宝を頂いてもよろしいのですか!？」

「良い、許す」

「ありがとうございます！ヤッター！」

マーレは飛び上がらんばかりに全身で喜びを表現している。マーレチャンカワイイヤッター！

だが、男だ。

「良かったな、マーレ」

「はい！フォレスト・サワタリ様！」

「あら、マーレ。モモンガ様からお褒めの言葉を頂いたのかしら？」

意外！それはアルベドだ！

「はい！あと…これも」

「スツゾ!？」

意外！それは左手薬指に輝くリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン！

アルベドの表情は悪鬼羅刹も死の支配者も、ベトコンすら失禁する迫力だ！

「あ、あ、アルベドよ。お前の忠義にも感謝して、これを渡しておこう」
「くふー！有り難き幸せ！」

当然の如くリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを薬指に装着

！
「デミウルゴスⅡサン、俺たちも頑張ろうな。」

「はい、私もかの至宝を授かるに値する貢献が出来るよう、精進致します」

「では我々はセバスに怒られないうちに帰るとしようか、フォレストⅡサン」

支配者達が転移して消えると、そこには女淫魔の雄叫びが響きわ

たつたとかなんとか。

ナム帰りの男がカルネ村をアンブツシユするようです

「これで画面をスクロールして、視点の変更は……こうか。よし！出来たぞー！」

「おめでとうございます、モモンガ様」

先ほどまでモモンガが、セバスの視線を気にしながらも、実際パントマイムめいた動きをしていたのはこの遠隔視の鏡を用いるためだった。

遠隔視の鏡は文字通り、自由に離れた場所の景色を見ることが出来るアイテムで、ゲーム中とはかく現状ではかなり役立つこと間違いなしなアイテムだ。

「ん、これは……祭りというには何か違うな……？」

「どうした、モモンガさん」

遠隔視の鏡に映るのは、兵士らしき武装した者たちが集落を襲う映像だった。狂おしいトラウマが、偽りのベトナム戦争の記憶が甦る！「こ、これは……おのれベトコン！焦土戦に守るべき民間人まで巻き込むか！許さん！」

！
サワタリから自然に威圧的なオーラが溢れ出る！半神の威圧Ⅳだ

「フォレストⅡサン、落ち着くのだ！一旦落ち着け！」

（ヤバイヤバイ、フォレストⅡサン完全に海兵隊モードだよコレ。しかし、不思議な事に人が殺されてるのを見ても何にも感じないな）
「どういたしますか？」

「助けに行く理由も利益もあるまい。」

「畏まりました。」

セバスが一礼した瞬間！わなわなと震えていたサワタリが大音声を発した！

「誰かが！誰かが困っていたらー！」

「助けるのは当たり前…… たっち・みー様の御言葉ですな」

サワタリという言葉を引き継いだセバスにたっち・みーの面影が完全に重なる。

モモンガは二人を順に見ると、大きく一つ頷き、決意した。

「分かりました。行きましよう！セバス、供をせよ！」

「ヨロコンデー！」

「へ転移門！イヤーツ！」

「ジェロニモーツ！」

モモンガがへ転移門を発動させた瞬間に、サワタリが二本のマチエーテを抜刀し飛び込んでいった。すかさずモモンガとセバスもサワタリの後を追う。

「サイゴン！ホーチミン！」「アバーツ！」「アバーツ！」

ストライク！ポイント倍点！全身鎧の兵士二名はボーリングのピンめいて首をマチエーテに吹き飛ばされる。

サワタリがコマンドワードである武器の銘兼カラテシャウトを発すると、投擲された二刀が瞬く間に、先ほどの軌跡を逆再生するかのように手元に戻る。

「何とか間に合ったか。モモンガさん！民間人二名を無事確保！」

「うむ、流石は我が懐刀よ」

「お見事にございます」

フォレストに庇われるような位置に、幼女を抱きしめるようにしてうずくまるのが姉で、抱き締められている方が妹だろうか。

「さて、お前たち、傷を負っているのではないか？」

「ひっ！お姉ちゃん…！」「大丈夫よ、ネム！大丈夫！」

モモンガが比較的やさしみのある声を出す、姉妹の間には今から死ぬかのような悲観的アトモスフィアが満ちている。

どこぞの兵士に殺されかけていたところを、傭兵か冒険者めいた男に救われたかと思いきや、骸骨のオバケが話しかけてきた。悲観的になっても仕方がないだろう。おお、ブツダよ！寝ているのですか!?

モモンガの問いに答えないという不敬に、温厚なセバスですら若干眉をひそめる。そこにモモンガのアイ・コンタクト・ジツだ！

（私のかわりにポーシオン渡してあげてください。なんかオタツシヤ

重点な勘違いされてますし)

(ハイヨロコンデー!)

「お前、負傷しているな? コレを飲め。これは実際俺がヒースを煎じてつくったポーションだ。傷に効く。この通り... 毒ではない」

サワタリが差し出したポーションを自分で一口飲んで見せたことで、安心したのか瓶を受け取り、姉と思わしき少女は一気に飲み干した。

「スゴイ...」お姉ちゃん治ったの? ヤッター!」

「傷は治ったようだな。では、〈生命拒否の繭〉! イヤーツ!」

モモンガは姉妹の周囲に生物侵入拒否の結界をはりおえると角笛を投げ渡し、告げた。

「そこに居れば大抵は安全だ。村人が私達のうちの誰かが迎えに来ない限り、そこから出ないことだな。ついでにその笛を吹けば小鬼の軍勢が守ってくれる、いいね?」

「アツハイ... あの、あなた方は一体?」

サワタリとモモンガは一瞬顔を見合わせ、お互いに頷いた。そしてサワタリとセバスが神妙な顔付きになるなか、モモンガは誇り高く名乗った! 彼らのギルドの名を!

「よろしい、我々こそアインズ・ウール・ゴウン! 覚えておくがいい!」
「アインズ・ウール・ゴウン... あ、あの、助けていただけありがとうございます!」
「ありがとうございました! 本当にありがとうございます!」
「ありがとうございました!」

「良い、気にするな」

サワタリが二刀のマチエーテ〈サイゴン〉へホーチミンを構えながら前進していく。その後ろにはモモンガが続き、殿はセバスだ。実際これは磐石なる陣形である。サワタリかセバスが時間を稼ぐ間に、シンゾウ・ニギリを仕掛ける算段になっている。モモンガは密かにこの陣形を、ハートブレイク・スゴイヤミ・ステイレットと名付けた。そして、なんかやみの魔法詠唱者っぽい仮面を取り出した。おお、なんとという邪悪なデザインだろうか! 嫉妬に狂う人間の表情めいて

いる！これではどのみち一般人は失禁するだろう！ナムサン！

「サイゴン！ホーチミン！サイゴン！ホーチミン！」

スススストライク！ポイントが倍点！3倍点！4倍点だ！投擲されたマチエーテが精確に首だけをピンめいて弾き飛ばされ、敵戦力は恐慌状態だ！これではシンゾウ・ニギリをしかける必要もないぞ！モモンガは肩透かしを食らった気分だった。

「ベトコンどもが！民間人は撃てても、この俺は撃てないか！俺は元第10山岳師団だ！俺は何をするか分からないぞ！」

（え？元海兵隊じゃないの？設定日替わりナンデ!?!）

（なるほど、フォレスト様は元々軍人だということとは存じておりましたが。それも山岳師団となれば人間の中でも精鋭のはず、そこでレンジャー技能を磨かれたのですね）

欺瞞！実際には院卒四年目のヨロシサン末端研究員だ！

「アイエエエ!?アイエエエ!?死にたくない！死にたくない！」

最早、敵の兵士達は腰が引けている！

「ドーモ、はじめまして。我々はアインズ・ウール・ゴウンです。」

「アイエエエ！アイエエエ!！」

ナムサン！話を聞いていない！しかも失禁している！NRS（ニンジャ・リアリティ・シヨック）だ！

「話をきけい！我々はアインズ・ウール・ゴウン！諸君の飼い主に伝える。この辺りで再び騒ぐようなら今度は、貴様らを皆ネギトロに変える…とな」

「アイエエエ!?!ヨロコンデー!！」

兵士達は一様に失禁しながら駆け出していた。全身鎧で分らないが、まず間違いなく激しく失禁しているだろう。

モモンガが兵士を追い散らしている間に、サワタリが無事の村民を引き連れて戻ってきた。サワタリは既にマチエーテを鞆に戻し、肩にタケヤリへ「デイエンビエンフー」を担いでいる。が、タケヤリの先端が異様だ！メザシめいて、一見して他の兵士よりも地位が高いと見られる男の頭蓋骨を貫通し、ぶら下げている！ちなみに彼のハイク（辞世の句）は「オカネ、オカネ、オカネ、実際オカネ」だった。そんなに金が大

事だったのだろうか。そんなに言うほどお金があるならそれを使って、オークションで神器級アイテムでも落札しとけばよかつたのに。ナム妄想で混濁した意識の中、サワタリは訝しんだ。

「モモンガさん、明日の朝ごはんにどうだろう」

「メザシのつもりか？ 悪趣味なことだな」

（あ、お目目がぐるぐるしてる。狂気だ）

「ベトコンどもは片付いた。彼はこの村の村長だそうだ」

血濡れのサワタリに促され、年嵩の男が前に出た。

「この村を助けていただき、まことにありがとうございます！ 私がこのカルネ村の村長でございます。どうか御三方にお礼をさせてくださいー！」

「フフ・・・何、私はこの通りの魔法詠唱者だ。自身の研鑽の結果を試してみたくなつたまでよ。このようにな！ へ中位アンデッド作製・デスナイト〓イヤーツ！・・・ああ、小銭がもらえればなお良いのだがな」

黒々としたコールタールめいた闇が、サワタリの放り出した頭蓋骨貫通死体にまわりつき、飲み込んでいく。

（スゴイ！ 死体に移っているぞ！）

出来のいいホラームービーを見たときの視聴者めいて盛り上がるモモンガ！ だが当然のようにひかる！ 沈静化！

（えー）

しかしその間にデスナイトは姿を現している。ユグドラシルでは見慣れた姿とはいえ、現実になった今はかなりの威圧感を放っていた。漆黒の禍々しい意匠の鎧兜にフランベルジュ・ケンとタワーシールドを備えた威容である！ ボロボロのマントにはへ死の騎士だ〓恐れを知らない〓などのシヨドーが威圧的なフォントで描かれている。

「小銭などと仰らずに、カルネ村をあげて出来る限りのお礼をさせていただきます！」

「実際奥ゆかしいことだな、村長。では、お言葉に甘えてセツタイしてもらおうでしょうか・・・」

「ハイヨロコンデー！」

(「デスナイトを従え、実際ヤバイ級戦士存在なフォレストIIサンとセバスを従えているように見える俺は、キョートの元老めいてもてなされた。だが、本当にほしいのは情報だ」)

朴訥な村長夫妻は三人のナザリック者を心を込めてもてなした。サワタリの強さについては村長夫妻も直に目にはしているため、警戒のため(ニンジャ知覚力で地面の振動を捉え、接近する存在を確認すつのだ)モモンガの背後に立つ二人はどちらも凄腕の戦士で、この貴族めいて世俗のことを知らない魔法詠唱者の護衛なのだと思われ、丁重に扱われた。

実際この朴訥な村長夫妻は、この三人のナザリック者が遠い異国から転移魔法の実験の結果転移してきたという、モモンガが話した事情を心から信じ込んでいる。欺瞞！

夫妻はモモンガ達に知る限りのことを話した。先ず、ユグドラシルの通貨は流通していないこと、そして周辺の地理について。このカルネ村とナザリックが転移してきたあたりは、リ・エステイーズ王国という国の領土らしい。また、王国は巨大な山脈を挟んで反対側にあるバハルス帝国と対立しているらしい。加えていうならば、毎年のように国境付近の城塞都市エ・ランテル近くの平野で争っているとのことだった。さらにその二国の南方には、スレイン法国という宗教国家も存在するそうだ。

村長によると、カルネ村を襲った兵士たちの盾や甲冑にはバハルス帝国の紋章が刻印されていたため、カルネ村を襲ったのは帝国の騎士たちということになるとか。確かに少数の部隊が防御線を突破し、浸透して後方の村を襲う。ベトコン共ならば容易いことだろう、とサワタリは首肯した。

「村長殿、他にはなにかあるかな」

「はい、村からもっとも近い都市がこのエ・ランテルになります。街道をまっすぐに行けば迷うことはないかと思いますが、道中オークやゴブリン、オーガなどがでるやも。御三方には無用の心配でしょうが・・・それとエ・ランテルには魔物退治等を生業とする冒険者達の組合などもございます。」

「ほう……それは面白い。貴重な情報感謝するぞ」

モモンガとサワタリ、そしてセバスは現在、カルネ村の墓地で行われている葬儀の様子を眺めていた。もちろんワンド・オブ・リザレクションはある。だが、まだまだ未知の世界を前にして死者蘇生を行うのは躊躇われた。そしてもっとモモンガを憂鬱な気分させたのはアルベドの取り乱しようだった。

状況終了後、ある種の酔いから覚めたモモンガがアルベドにへ伝言を繋ぐと、セバスを連れていたとはいえ突如として消えたモモンガをどれほど心配していたかということ、千の言葉をもって説かれた。純粋な忠誠、愛情はモモンガとしても嬉しかったが、実際かなり息苦しいのも確かだった。現在アルベドは透明化のできるシモベを連れ、完全武装の状態でカルネ村付近に待機しているという。今後はアルベドにも一報入れることを約束し、頼りにしているとの言葉を添えて即座に帰還させた。実際サラリマン時代の経験が生きていた。一言添える、これが重要だ。

（冒険者か……フォレストⅡサンとなら冒険タノシイヤッターだろうけど、守護者たちが許してくれるかな）

「モモンガⅡサン、厄介なことになったぞ」

「狂気から覚め、先ほどから一言も発さずにいたサワタリが不意に口を開いた。」

「どうした、フォレストⅡサン」

「騎乗しているであろう戦士存在が30やそこから接近している。間違はなく狙いはこの村だろうな」

「増援か？」

「いや、わからん。だが生き残りの村人を村長の家にも集めて戦いに備えねば。セバス！」

「はっ！」

「今の話を村長に伝え、村人を村長の家に誘導しろ。俺とモモンガⅡサンとセバスがいれば村長ぐらいは守れるだろうから、交渉役に村長を広場に寄せ」

「ヨロコンデー！」

セバスが走り去ると、モモンガが額を手で押さえる。やっかいなことになった。

「フォレストⅡサン、俺、本格的に人じゃなくなっちゃったみたいです。あんなネギトロみたら普通は嘔吐するだろうに、何も感じないんです。NPCの忠誠も重いし、このまま、この世界でやってけるんでしょうか・・・」

「二人だったらヤバイことも、二人いれば実際何とかあります。人じゃないのは俺も同じです。モータルを何人ネギトロにしようと思っても憐憫もない。邪悪ですね。だが、今日の殺しはナザリックと俺たちに必要な殺しだった、でしょう？ たっちⅡサンの思いを果たし、情報も手に入れた。かなりの成果です。だからコレが終わったら、フロに入ったリフートンで憩いしましょう。そして冒険の相談をしましょう！ ダイジョブダツテ！」

「ははは、そっか・・・そうですね。たっちⅡサンから受けた恩も返せたいし、情報も手に入った。冒険もある。頼りにしてますよフォレストⅡサン」

サワタリは大きくうなずくと、モモンガと連れ立って村の広場へと歩き出す。これが異世界における、アインズ・ウール・ゴウンの刻む一歩目であった。

ナム帰りの男が地獄を見せるようです

「貴殿がこの村を… 救ってくれたのか」

馬上の男が言った。精悍な顔つき、一見してよく鍛え上げられていると分かる肉体、そして実際ゲーム序盤めいた装備。

モモンガが抱いた第一印象は、強そうな男、だった。彼の引き連れる戦士達は武装の統一性もなく、歴戦の傭兵団めいたアトモスフィアを漂わせている。

「ドーモ、リ・エステイーゼ王国所属！王国戦士長のガゼフ・ストロノーフです！」

先手をとって電撃的にアイサツだ！

「ドーモ、我々はアインズ・ウール・ゴウンです！こちらは私の友人と、執事です。実際私達は遠方よりやって来たのでカルネ村とは無関係だが、襲われていたので助けてやった格好だ。わかりますね？」

やや、威圧的だが奥ゆかしさに欠けているわけではない！サラリマン特有のバランス感覚だ！

「私は上意を受けて、この近隣を荒らしているという帝国兵の討伐のため、辺りの村を回っている。この村を救っていただき、感謝の言葉もない」

ガゼフは躊躇わずに頭を深々と下げ、謝意を示した。実際奥ゆかしい。

「フフ… 実際私は遠方から来たので、この辺りの貨幣を持っていないのです。要は報酬目当てですよ、お気になさらず」
「ところで、敵はすべて貴殿が？」

視線の先には赤黒い血が染み込んだ形跡のある土が、そして装備を剥がれた帝国兵の死体が一カ所に積み上がっている。帝国兵の死体は欠損が酷く、村人達の怒りの捌け口になったのは明らかだった。

しかし何より目をひくのは、この魔法詠唱者の後ろに聳え立つように控えるアンデッドの姿だ。ガゼフをして、恐ろしいまでのパワを感じる。

「まさか！私が操るこのデスナイトが半分… 後は我が友の戦果です

よ…魔法詠唱者として万能ではありませんからな」

ガゼフはなおも何か言いたげであったが、年若い戦士が告げる急報に口を閉ざした。

「伝令！周囲に複数の人影！村を包囲する形で接近しつつあります！」

「…どうだ？」

「確かにいるな、これは。しかも結構な数だ。」

サワタリのニンジャ知覚にも、既に村の周囲に複数の人間が展開しているのが感じ取れた。先ほどの戦闘でこの地の戦士存在の力量は大体理解したが、敵の接近に気付かないのは実際油断だ。美味しい食事に、普通の人間とのコミュニケーションが沢渡森としての精神を表出させ、精神の弛緩を生み出していた。

「スウーッ！ハアーツ！」

ゲーム中ではただの回復スキルだったチャドー呼吸だが、現実となった今ではマインドセットの効果ももつ、極めて実用的かつ実戦的なスキルとなっていた。

意図して、カルネ村周囲の森林をバンブージャングルだと思いつく。空には軍用ヘリコプター・イロコイが飛び交い、ワーグナーのワルキューレの騎行が大音量で流れる。ナパーム掃討が行われる予兆だ。数秒後には、サラリマンの沢渡森から、狂気の邪悪ニンジャ存在フォレスト・サワタリへと変貌していた。

「斥候の情報によれば、天使を召喚する魔法詠唱者が多数いるようだ。それを考えると、相手はスレイン法国のトクシユブタイだろうな。恐らく狙いは私だ」

「戦士長殿は憎まれているのですね」

「ははは！この地位に就いている以上は、受けて立つまでのことだ」
「ところで、アインズ・ウール・ゴウンと言ったな。執事の方はおもかく、そちらのお二人。我々に雇われる気はないか？」

モモンガとガゼフの視線が交錯する。

「我々は実際無関係だ。お断りさせていただきます」

「まあ…仕方ないだろうな、では御元気で。この村を守ってくれたこと、感謝しよう。それと、我が儘を言うようだと申し訳ないのだが、もう一度村人達を守ってやって欲しい。その間に我々は囿となり、解囲を試みる。何とぞ、このストロノーフの願いを聞き入れてもらいたい。」

「我らアインズ・ウール・ゴウンにお任せあれ。村人は必ず守りましょう。それと…こちらをお持ち下さい」

モモンガは懐から木彫りのタリスマンを取り出した。これは実際500円ガチャのハズレ品で、全く痛手ではない。

「後顧の憂いもなく、腕の立つ魔法詠唱者からタリスマンまで貰えるとは、今日についてはな！ではサラバ！」

そうしてガゼフ・ストロノーフ戦士長以下勇敢な戦士達は騎乗し、去っていった。

「モモンガ様、この後はいかが致しますか？」

「なかなかどうして熱い男じゃないか、彼は。彼奴との約束を守ってやろう。フォレストⅡサンも構わないな？」

「畏まりました」

「ヨロコンデー！」

ガゼフ率いる戦士団の行く手には、既に多数の天使が展開を終えていた。これではファイア・イン・サマーバグだ！

ガゼフは何体もの天使を切り伏せるが多勢に無勢だ。勇敢な戦士達が次々と負傷し、大地に伏していく。

「イヤーツ！〈六光連斬〉〈即応反射〉〈流水加速〉〈能力向上〉！」

一体、二体、三体、四体もの天使を瞬く間に切り伏せる！ゴウランガ！ガゼフ！

「ゴウランガ…だが、それだけだ。マジック・アロー！イヤーツ！」

「イヤーツ！」

「イヤーツ！」

「イヤーツ！」

おお、ナムアミダブツ！ガゼフに四本ものマジック・アローが着弾！ブツダよ！起きて下さい！

当然の如くブツダは目覚めない。ガゼフは血を吐き、仲間の戦士達のように崩れ落ちる。が、何とか剣を支えに戦闘体勢維持！

「ア、アバツ…！」

「ドーモ、陽光聖典のニグンです！愚か者のガゼフⅡサン初めまして。」

シツレイだ！もはや何がとかいうレベルではなくシツレイだ！あまりにも奥ゆかしさを失ったアイサツにガゼフは怒り、吼えた！

「ドーモ！俺は王国戦士長にしてこの国の守護者！ガゼフ・ストロノーフです！この国を汚し、民を傷つける貴様らを許しはしない！」

「おお、愚か愚か。良いことを教えてやろうか？私たちはお前を殺した後、生き残りの村人を無惨に皆殺しにする。もちろん慈悲はない。無駄な足掻きは止めろ、ガゼフⅡサン。せめてもの情けだ、ハイクを讀め。カイシヤクしてやろう」

（そろそろ交代だ、ガゼフⅡサン！我々の堪忍袋がばくはつしたぞ！）
「この声は…!?!」

次の瞬間、ガゼフは屋内にいて、天井を見上げていた。周囲の村人が心配そうにガゼフを覗き込み、何か言っている。ガゼフの身体はもう既に限界を迎えていた。徐々に視界がボヤけ、ガゼフの意識は安堵と共に暗転した。

「ドーモ、初めまして。スレイン法国の皆さん。我々はアインズ・ウール・ゴウンです！武器を捨てろ、我々は何をするかわからないぞ？」
モモンガは誇り高く名乗った！彼らのギルドの名を！

「ふん、武器を捨てろだど？無知蒙昧もここまで来ると隣みすら感じるな。たかが三人に何ができる！やれるものならやってみるがいい！」

ニグンは吐き捨てるようにいい、三人のナザリック者を睨み付けた。その瞳はどこまでも純粹で、どこまでも信仰心に満ちていたが、それゆえにかなり邪悪でもあった。彼らは自分たちの行いを神の名

のもとにすべて正当化するだろう。

「ところで、ニグンⅡサン。実は我々は、先ほどのあなたと戦士長の会話を聞いていたのですが、あなたは言いましたね?・・・我々が!手間をかけて!救った村人を!無慈悲に皆殺しにすると、そう言ったな!」

モモンガから吹き出すオーラはまるで、絶望を可視化したようなそれだ!陽光聖典の隊員の中でも修練の足りていないものは既に失禁している!

「それがどうした!?私たちの行動は全て人類のため。それを邪魔立てする貴様らこそがパブリック・エネミーなのだ!貴様らを殺してガゼフも殺す、当然村人も殺す!」

モモンガは既にひかる寸前だ。冷たく残酷な怒りの炎が燃え上がる!

「フォレストⅡサン!セバス!ナザリックの威を示せ!」

そしてついに死刑宣告めいた一言が発された!セバスは右側面、サワタリは左側面から猛烈な勢いで接近する!アークエンジェル・フレーム程度では足止めにもならない!

「イヤーツ!イヤーツ!イヤーツ!」「アバーツ!」「アバーツ!」「アバーツ!」

おお、ガイキ!気の力で強化された拳の一撃が脆弱な魔法詠唱者の頭蓋を粉碎!粉碎!粉碎!

「サイゴン!サイゴン!サイゴン!サイゴン!」「アバーツ!」「アバーツ!」「アバーツ!」「アバーツ!」「グワーツ、アバーツ!」

ニンジャ脚力で迎撃のホノオ・ノ・アメやマジック・アローをかわし、マジックシールドをダブル・イアイドで切り裂く!二刀のマチエーテをクロスさせ、ギロチンめいて魔法詠唱者の脆弱な肉体をキリミにする!

恐怖のあまり失禁し、後ずさった魔法詠唱者は何かに足を取られて尻餅をついた。トラバサミだ!何故こんな場所にトラバサミが?その答えは明白だ!手練れのレンジャーが使用するスキルへ上位罫設置!トラバサミについて非常に熟練したサワタリは、視界内なら

五個までトラバサミを設置することができる！

「アイエエエ!? ナンデ!? トラバサミナンデ!？」

「それは俺がベトコンだからだ!」

純粹な信仰に染まった薄汚い返り血に、その身を真紅に染めたサワタリが威圧的に言った。

「ベトコンなんて知らない! 死にたくない死にたくない!」

「説明はせぬ! ジェロニモ!」

「ソナナ!? アバババーツ!？」

陽光聖典の隊員は急所を破壊されショック死だ! 恐怖のあまり固まっている者も、戦う姿勢を見せるものも、みな等しくニンジャと竜人にその命を刈り取られた。

「さて、ニグン!! サン。先ほどあなたは言いました、出来るものならやってみると。今の気分はいかがですか? 私は実際かなりスカツとしました!」

モモンガがひかる! よっぱどニグンの振る舞いがかつての異形種PK者めいて腹に据えかねたのだろう!

「こんな・・・こんなバカな! 我々は人類の守護者、陽光聖典だぞ! こうなればしかたあるまい! 最上位天使で貴様らを滅ぼす! シナバモロトモ!」

ヤバレカバレだ! ニグンはローブの懐から魔法封じの水晶を取り出した! 右手で! しかし、右手が肩口から引き千切れ、地面に落ちる! 何が起こったのだろうか?

「ドラゴン・ヒノクルマ・アシ! イヤーツ!」

見よ! セバスの飛び込み前転からの踵落としだ! あれこそまさに、ドラゴン・ニンジャ・克蘭に伝わるカラテ技、ドラゴン・ヒノクルマ・アシである! 真の姿は竜人であるセバスがこのカラテ技を使用できることはなんらおかしくない! ドラゴン!

「グワーツ! オノレー!」

ニグンは鍛え上げた身体能力でもって、瞬時に魔法封じの水晶を拾い上げる! 左手で! しかし、左手が肩口から引き千切れ、地面に落ちる! 何が起こったのだろうか?

「サイゴン！」

それはベージュシツクなカラテアーツ、カワラワリ・パンチだ！セバスの蹴撃にあわせ、音もなく飛び上がったサワタリの、無慈悲かつ精密な一撃だ！いわゆるゲームでいうところのSTRとAGI全振りであるサワタリの一撃は、人体ですらトウフにハシを入れるがごとく、容易く破壊する！しかも実際のところモモンガがバフの重ね掛けを後ろから飛ばしているの、サワタリのカラテ段位は現在1.8倍近い！

「アバババーツ!？」

サワタリのカワラワリの一撃が巻き起こした衝撃波でニグンは吹き飛ばされ、三回バウンドした後失禁し、気絶した。

「モモンガ様、奴めが所持していたマジックアイテムにございます」

奥ゆかしく魔法封じの水晶を手渡すセバス。これは衝撃波で吹き飛んだニグンの左手から、素早くセバスが回収したものだ。

「フウーム、せっかくの魔法封じの水晶に第七位階の魔法を込めるなど正気ではないな」

「至高の御方々を害そうなどは、許しがたいことにございます。奴めをニューロニストに引き渡しては如何でしょうか？」

両手を肩口から失ったニグンから、さらに両足を切り飛ばし、サワタリがニグンの頭を掴んで引きずり戻ってきた。

「フォレストIIサンありがとうございます。でも足を切り飛ばす必要性は・・・?」

「特にはない」

「アツハイ」

邪悪！へびめいた目つきが狂気によってグルグルし、アブナイな殺人衝動に駆られていたのだ！

「フォレスト様、お持ちいたします」

「ありがとうセバス。だが、このようなモノを手袋だけで触っては手が汚れる。先ほど見事なカラテ技を見せてもらった褒美だ、受け取れ。」

そう言うと、サワタリは自身の手首をリストカットめいて切り裂い

た！血飛沫！ついに完全な発狂マニアックになってしまったのだろうか!?セバスとモモンガは非常に動揺した。モモンガはひかった。

だが、動揺する二人をよそに、サワタリは血を操作し何かを形作っている！

ここで読者の皆様の中に、古代ニンジャ考古学に深い見識をお持ちの方がいればサワタリが何をしようとしているのかお気付きなのではないだろうか。説明しよう！真なるニンジャの血液は鉄と硫黄で出来ているのだ！つまりサワタリの体を流れるのはモーターめいた赤い血ではなく、赤黒く熱された最硬級の鑄鉄物質なのだ！

そして真なるニンジャは、自身の血を防具に成形することも可能だ。さらには神話存在のニンジャ（100レベル）の血から作り出された防具である。その性能は神器級にも匹敵するだろう！ただしこのブレーサーはサワタリの死亡とともに崩壊するので、サワタリという神（ニンジャ）がセバス（信仰者）に力を与える代わりに、セバス（信仰者）はサワタリの力となる原始的信仰契約関係が成立したことをも意味するのだ！

ちなみにサワタリはそこまで考えていない！ご褒美感覚だ！オヤツ！

「ありがたき幸せ。このセバス・チャン、命尽き、永遠に滅び果てるその瞬間まで、たっち・みー様の後継たるフォレスト様にお仕えいたしますぞ」

「え、アツハイ」

「アツハイ」

思わぬ激烈な反応にサワタリの狂気も覚めるといふもの。モモンガはひかり、サワタリも少し狼狽した。

「先ずは、我々が皆に何かを伝えることもなく動いたことを詫びよう！」

ここはナザリツク地下大墳墓、その玉座の間だ。玉座にはその王権の象徴たるスタッフ・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを持つモモンガが、玉座の真横にはアグラ姿勢でモモンガの言葉を傾聴するサワタ

リがいる。

当然のように守護者たち、そして全てのシモベは跪き、モモンガの言葉に緊張感をもって聞き入っている。

「詳しいことは同行したセバスに聞け。ただ、一つだけ緊急に伝えるべきことがある！」

「今日、我々は外の大地において記念すべき一步を踏み出した！それはこの地にアインズ・ウール・ゴウンの名を知らしめる第一歩だ！今後はナザリックに所属するもの全てが、自身をアインズ・ウール・ゴウンの栄光を分かち合う者だと自覚し、アインズ・ウール・ゴウンの名を高めることを至上の目的として行動するように！」

「ご尊命伺いました。いと尊き御方、絶対の忠誠を！アインズ・ウール・ゴウン万歳！」

全てのシモベがアルベドに続きアインズ・ウール・ゴウンを讃える言葉を口にする。

「この世のすべての者が御方々の力の偉大さを知り、その神話を崇めるようになるでしょう！」

デミウルゴスが感動したように、体の震えを抑えながら言葉を発した。

「お前たちに厳命する！アインズ・ウール・ゴウンを不変の伝説にせよ！」

「ハイ！ヨロコンデー！」

（この世界に來ているかもしれないみんなの為にも、ギルドの名を広めなくては。ガンバルゾー！）

「デミウルゴス、御方々と話した際にモモンガ様が仰ったことを皆に伝えてちょうだい」

既にモモンガの去った玉座の間に、守護者たちとその他のシモベの姿がある。

「モモンガ様はこう仰いました。世界征服なんて面白いかもしれない、と」

「各員！ナザリックの最終目的は至高の御方々にこの世界のすべてを

お渡しすることだと知れ！ガンバルゾー！ガンバルゾー！ガンバルゾー！」

「ガンバルゾー！ガンバルゾー！ガンバルゾー！」

「ガンバルゾー！ガンバルゾー！ガンバルゾー！」

「ガンバルゾー！ガンバルゾー！ガンバルゾー！」

シモベたちの雄叫びは玉座の間に響き渡り、その本気の度合いを明白に示していた。

守護者以外のシモベが持ち場に戻った後。

「ところでセバス、なぜ貴方はそのようなブレイサーを右腕に装備しているのかしら？」

アルベドが訝しげに問う。それはカルネ村よりの帰還の際から皆が気になっていたことだった。

「まさか、セバス。君は至高の御方から頂いたその在り方、姿形や衣服、装備までもそうだが、それを換えようというのかね？」

デミウルゴスが若干の失望と怒りを込めて問う。

「こちらはフォレスト様より頂いたもの。それもこの品はフォレスト様御自らの手で、その貴い血を形成し作られたもの。偉大なる御方はこの強大なるブレイサーとご尊名を略してお呼びする名誉を私めにお与えになることで、たっち・みー様の後継として正義を実現し、アインズ・ウール・ゴウンの剣となり盾となる御覚悟を示してくださいましたのです。」

不思議なことに、このブレイサーはセバスが右腕を本来の姿に戻しても、それに応じて形を変えあつらえたようにセバスの腕を保護し

た。今もセバスにはサワタリとの間に何らかの魔法的ラインが形成されていることを確認できる。

「何ト!? フォレスト・サワタリ様ノ血液カラ・・・道理デ凄マジイカラ感ジル訳ダ」

「ずるいよセバスばかり〜! アタシもフォレスト・サワタリ様とお話ししたいよ〜」

「私もペロロンチーノ様がどうしておられるかお聞きしよう存じんす・・・」

「なるほどね。モモンガ様はフォレスト・サワタリ様に対して対等に振る舞われるのに、敢えてモモンガ様の下に自分を位置されるのにはそういった理由が・・・そして、やはり大きな目的のために指揮系統を一本化する御積りでもあるのだね。流星は闘争の化身にして至高の御方々の古くからの友であられ、今は我らの主として君臨される御方だ」

そんなことはない! サワタリはモモンガにだいたい支配者ロールをぶん投じているだけだ! 誤解!

「私もモモンガ様の肋骨から作られた杖とかいたただきたいわ、もしそんなことになったら・・・なったら・・・くふーっ! くふふ! くふふ・・・」

「やれやれ・・・私達もフォレスト・サワタリ様の御覚悟にふさわしい働きをみせなくてはね」

サワタリの意図した以上の効果が実際起きている。これはモモンガが肋骨を狙われる日も近いかもしれない。

ナム帰りの男がナザリツクの支配者と憩うようです

ナザリツク地下大墳墓、大浴場・スパ・ラクエン・ナザリツクに二つの影があった。片方は骸骨で、片方は……ニンジャ！ニンジャの……入浴！

おお、何と悪夢的な光景なのだろうか！骸骨とニンジャが、かの国民的アイドルユニット「ネコネコカワイイ」の楽曲、「ほとんど違法行為」を歌っているのだ！デュオだ！

しかも、歌いながら身体を洗っている！何たるマッポーの一側面だろうか！

「あなたもそれで楽しい気・持・ちでしょ♪」

「ハイ！ハイ！」

湯船に浸かるモモンガが王侯貴族めいた声で歌う！

「今夜サツキヨーライン下りた〜」

「私のこと助ける権利〜あげるから〜」風呂場に声が反響する。ミソジのニンジャとミソジが近付く骸骨のデュオだ。

「激しく前後に動く〜」

「ほとんど違法行為〜」

「私もモモンガ様と前後したいであります！」「前後したいとの仰せなら、今アルベドが向かいます！」

脱衣場の方から何か物音が聞こえるが気のせいなのだろう。

「そういえば、ネコネコカワイイってオムラでしたよね」

「デスネー」

「へロへロさんもオムラ系列だったな〜」

「デスネー、我ら等しくこの世を機械、か」

「へロへロさんもテックへの誇りがあるから、ウシミツ残業も何とか乗り切れるって言ってましたね」

カポーン！奥ゆかしいシシオドシ音声が響く。これも利用者をリラックスさせるための機能の一つだ。

だが、実際のところオムラは経営者が代わってからというものの破壊

力重点主義とでもいうべき方向に経営方針の舵をきっており、ヘロヘロの所属するオムラ・エレクトロニクスシステムズのような電脳・AI関連事業は軒並み縮小され、リストラや提携打ち切り、資本引上げの憂き目にあっているのだ！

オムラ・エレクトロニクスシステムズがかろうじて命脈を保っていられるのは、かのオイランドロイドデュオ、ネコネコカワイイに彼らの開発したテックが関わっているからだ。なんたる暗黒経営資源集中戦略だろうか！なお、経営者が代わってからというものオムラ重工は株価が右肩下がりだ！

サワタリの属するヨロシサンなど、この機会にバイオサイバネやバイオウェアのシェア拡大を狙っている。まさにマッポー！まさに暗黒過剰競争社会である！

だが、今の二人にそのようなリアルな社会情勢など無縁のことであつた。彼らは解き放たれ、そしてまた、ナザリックと異世界に囚われたのである。オムラも、ヨロシサンも、ZBRもシャカリキも、ゴスもヤクザも鼻持ちならない退廃的高校生も最早彼らとは無縁なのだ。今や彼らは人類を超越したものとなり、搾取される側から搾取し、弄ぶことを可能とする側になつたのだ。

風呂場に沈黙の帳が下り、二人が考えたことはかつての仲間のこと、そして全く人類とは変容してしまつた自身のことであつた。そこには一切、リアルがどうなっているかとか現実の自分の身体がどうなっているかとかは含まれない。モモンガとフォレスト・サワタリにとっては既にこちらの世界がリアルなのだ。

「入れ。」

控え目なノック音の後に、モモンガの執務室の扉が開かれる。シャルティアだ。

「モモンガ様、フォレスト・サワタリ様、ご機嫌うるわしゅう存じんす」
スカートを摘まみ、優雅に一礼するシャルティア。これは実際キョートの社交界でも通じる程の、雅な変則的オジギである。

「して、シャルティアよ。今日は何用で私のもとに来たのか。話すが

良い」

「それは勿論、モモンガ様のお美しい姿を一目でも拝見したかったからでありんすえ」

頬を赤く染め、やや小首を傾げながらの上目遣いは吸血鬼特有の色気と相まって効果が三倍だ！

「あら、じゃあもう目的は達したわね。既にモモンガ様からは御下命が有ったのだから疾く立ち去れば良いのではないかしら？」

すかさず、アルベドがインターセプト！完璧に気配を消しながら控えるサワタリの気遣いに感謝しながら、モモンガとの時間を楽しんでいたので。当然、恋敵たるシャルティアには二人の親密度を過剰アツピールだ！

モモンガの右肩辺りに軽く豊満を当てた会話姿勢から、シャルティアの前へと進み出て睨みを効かせる！コワイ！

「ああら、本題に入る前に挨拶を挟むのは当然のことだというに。全くこれだからトウの立った賞味期限切れオバサンは嫌なこと、忙しくて忙しくて…」

口元を軽く手で隠しながらの嘲笑だ！これは口角の辺りを少しだけ見せ、後は目遣いでもって対象を嘲る奥ゆかしく、高度な罵倒術だ！

「あら、保存料を重点して無理やり賞味期限を無くしたモノよりかはマシではなくって？そんなゲテモノ、モモンガ様がお召し上がりになるかしら。」

痛烈！アンデッドであるシャルティアを皮肉る禅問答めいた罵倒、まるで切れたナイフだ！

「賞味期限切れで腐ったモノを召し上がってモモンガ様の体調に障りがあつてはコトでありんすえ。食中毒の原因は遠ざけなくては…」

「…そもそも、どこぞのゲテモノには食べるどころが有るのかしら？食品ディスプレイは大量に重点してるようだけれど」

痛烈！そして偽乳！

「アッコラ、テメツアルベドコラ、誰が食品ディスプレイだッコラー！アリンスコラーツ！」

「ザツケンナシャルティアカラー！何が賞味期限切れだカラー！スツゾ、スツゾ、スツゾカラー！」

アルベドとシャルティアの顔が近い！今にも額が触れあいそうな距離かつ、一触即発の気配だ！

モモンガは、完全に気配を消して休め姿勢で控えるサワタリを恨めしげに見やるがサワタリは素知らぬ顔だ。口笛まで吹いている！ナムサン！

「二人とも、戯れはそこまでにせよ。シャルティアは本題に入れ」

「ハイ、ヨロコンデー！」

「はい、モモンガ様」

なんとというニンジャ顔負けの身のこなし、切り替えの早さだろうか。モモンガは女性の持つ根源的恐怖を味わったような気分になった。そしてサワタリは素知らぬ顔だ！

「これよりモモンガ様の御命令の通りに、武技とやらを使う人間の調達に行つて参りんすに、今後少うしばかりナザリックに帰還し難くなりんすから、ご挨拶に伺いんした」

「うむ、務めを果たし、無事に戻つてこい」

その後、モモンガとサワタリが直接外に出て情報収集を行うことをアルベドとデミウルゴスに伝えたところ猛烈に反対されたが、最終的には階層守護者を一名連れていくことで決着を見たのであった。

「ところでモモンガ様、フォレスト・サワタリ様。本当にお供するのは私で良かったんですか？」

「アウラよ、間違っているぞ…！今の私達は冒険者パーティー、アインズ・ウール・ゴウン！私は冒険者のモモンで、フォレストIIサンは熟練の傭兵サワタリだ。そして、お前は我々の友人の子供フィオという設定だ。忘れるな。」

モモンガの瞳が兜のバイザー越しに妖しくひかる。コワイ！

「しつ、失礼しました！モモンガ様！」

「モモンダ！」

「アイエツ!?失礼しました！直ちにケジメします！」

「ケジメはしなくてよい。しかしアウラよ、お前を随伴させたのは他でもないナザリックの為だ。冒険者といえは強力な魔獣と手に汗握る戦いを繰り広げるもの！その際に下した魔物をお前にティムしてもらいたいのだ」

モモンガ、いやモモンは身振り手振りを交えながら、これからの冒険の展望を語った。熱っぽく！兜のバイザー越しにモモンの瞳が妖しくひかる！

「モモン〓サンよお、その辺にしたらどうだ。フィオが縮こまっちゃまってるじゃねえか、只でさえロリータ重点なんだからこれ以上縮んだら見えなくなるんじゃないやねえか？」

サワタリは既に役に没入していた。今や彼はノトーリアスと、サラリマン時代に見た傭兵崩れを足して二で割った様なアトモスフィアを発している。アウラの、いや、フィオの頭をサワタリが乱暴に撫でるとフィオはやや赤面した。

「フィオ、サワタリ〓サンを見る。完璧な役作りだろう？お前も見た目の年齢相応に振る舞うのだ！良いな？」

「はいっ！モモン〓サン！」

「それで良し！では行くぞ！」

「銅のプレートが三人か。まあ、一人は嬢ちゃんだしな。二人部屋でいいか？」

「ああ、頼む」

ところ変わって、冒険者の宿。ここは実際銅のプレートから銀のプレートの中でも実力が低い方のレベルの人間が集まる酒場兼宿だった。基本的にこういった冒険者の宿では、価格帯の設定から同じ位の實力の者が集まるようになっており、パーティーやタッグを組みやすくなっているのだ。

その中であって、漆黒の豪勢な鎧兜の戦士、いかにも熟練の傭兵め

いた男と、可愛らしいボーイッシュユエルフが銅のプレートを下げているのは非常に悪目立ちした。

「オイオイオイ、銅のプレートのお癖に随分良い装備してるじゃねえか。それに俺は、お前が連れてるような平坦な娘が好みなんだよ！俺らに一晩貸してくれよオ！」

ナムサン！チンピラめいた見た目だが、下げているのは銀のプレートだ！彼は江乱照御繩談合（エ・ランテルロープウェイ克蘭）のジャーメイン！

彼等は馬に乗り、メイスを持ち、投げ縄を使ってバツファローやオークを引き摺り回して殺す血も涙も無いパーティーだ！駆け出し冒険者のモモン達には辛い相手ではないだろうか!?

「ハイ、ドーモ。サワタリです。ヨロシク」

「ドーモ。：。なんだテメエは！実力差を身体に教えてやっても良いんだぜ？」

今にも争いが始まりそうな剣呑な空気！ロープウェイ克蘭の残りの三人はニヤニヤ笑いでモモン一行を眺めている！非道！ブツダよ、起きてください！

「サイゴン！」

モモンとジャーメインの間に割って入ったサワタリの、ポン・パンチだ！このサワタリという男はもしやカラテのブラックベルトなのか!?

まるでニンジャめいた身のこなし！ワンインチ距離からのポン・パンチだ！ジャーメインは吹き飛び、テーブルを破壊しながら女冒険者に激突！ポーシヨン瓶無残！女冒険者は気絶！ジャーメインも気絶だ！

「ポーシツ！トリーボーシツ！」

コワイ！ヤクザスラングだ！善良な王国民であれば失禁不可避の迫力である！

彼はロープウェイ克蘭のリーダー、スミスだ！ 彼等は馬に乗り、メイスを持ち、投げ縄を使ってバツファローやオークを引き摺り回して殺す血も涙も無いパーティーだ！

「アンドレ！デイーボ！ヤッチマイナー！」

「ハツハア！ハツハア！」

「スツゾコラー！」

凶悪な形状のメイスを構えた巨漢が二名、サワタリににじり寄ってくる。そして…

「ハツハア！」「スツゾコラー！」「サイゴン！」「グワーツ！」「サイゴン！」「グワーツ！」「サイゴン！」「グワーツ！」「サイゴン！」「グワーツ！」「サイゴン！」「グワーツ！」

おお、なんとというジュージツの練度か！サワタリは瞬時に片方の背後に回ったかと思えば、襟首を掴み前後に投げ続けているのだ！そして接近してきたもう片方に投げ続けている男をぶつけて隙を作り、すかさずイポン背負いだ！

既に投げ続けられているアンドレは失禁している！

（いきなり消えたと思ったらアンドレの背後に現れた！こんなことが出来るのはニンジャだ！間違いなくニンジャだ！ニンジャナンデ!? ニンジャナンデ!?）

スミスはNRSを起こしてしめやかに失禁！無関係のウェイトレスもつられて失禁している！

そしてドゲザである！スミスはニンジャリアリテイショクから復帰すると同時にドゲザ！

モモンに目で合図するサワタリ。するとモモンはスミスの頭を踏みつけて言った。

「我々はアインズ・ウール・ゴウン。そして我々は強者だ。これはブラフではない、わかりますね？」

「ハイ！スミマセンデシター！」

「今後はこういう行為は慎むように。わかりますね？」

「ハイ！スミマセンデシター！」

「では、また。今後ともヨロシクオネガイシマス」

「ハイ！スミマセンデシター！」

「行くぞ。フィオ、サワタリ！サン！」

（くーっ！絡んでくる柄の悪い先輩冒険者を撃退！テンプレ！スカツとした！サワタリ！サン良いぞもつとやれ！）

モモンは兜のバイザー越しに妖しく瞳をひからせた。

「はーい！」

「ああ、分かった。それと店主！」

サワタリはポーション瓶を一つ放った。

「これは？」

「そこでお寝んねしてるお嬢ちゃんに俺からのプレゼントだ。ヨロシク」

「アツハイ」

エ・ランテルに彗星の如く現れた冒険者パーティー、アインズ・ウール・ゴウン。彼等は一体何者なのだろうか!? サワタリはニンジャなのか!? 褐色エルフ元氣娘と前後は出来るのか!?

今は店主の手の内に輝く、血の如きポーションだけがその答えを知っていた。

ナム帰りの男が冒険者としての一步を踏み出すようです

エ・ランテル某所。やや埃っぽい冒険者の宿の一室。そこには何の統一性も無い三人組の姿がある。

一人は、偉大なる漆黒の甲冑に身を包んだ戦士、一人はまだ成熟したとは言えない、少年的な魅力のあるエルフの少女。褐色の肌は、まるでチョコレートソースを塗りたくったかのような滑らかさで、この年頃の少女特有の柔らかかな少しばかりの甘みを含んだ香りを漂わせている。ササの葉の様な形の良い耳、ぱっちりとした大きな目、心底楽しげでこれからの冒険に期待している事を如実に表すやや紅潮した頬と、魅力的な笑顔の一要素たるぷるぷるの唇は男達の目を惹き付けて止まない。しかしそのバストは平坦だった。

そして、最後の一人。向かいあった相手に抜き身のナイフを想起させる蛇めいた目付き、竹林のタイガーの如き肉体、そして油断なく張りつめたアトモスフィアを纏っている。何より目を惹くのは、腰のナイフシースに納められた二刀の短剣である。一見するとただのククリナイフなのだが。ところで、読者の皆様の中に古代ニンジャ考古学を学んだ事がある方はおられるだろうか？

もし、おられるならば我が身の不運を呪いながらの失禁は免れないだろう。一見するとただのククリナイフにしか見えない短剣だが、よく観察すると大振りな拵えになっていることに気付くはずだ。

それもそのはず、この二刀の短剣は古代のニンジャウエポン、ヘマストダイ・ブレイドのだから！刀身には「必ず死ぬ」の邪悪な漢字が、平安以前のニンジャルーン・フォントで刻まれている。コワイ！コワイ過ぎる！

このような危険極まりない、敵に出血を強いて無慈悲な死を与える為の武器を備えたこの男は一体何者なのか!? 熟練の傭兵? いや、まさか、ニンジャなのか!? そのような事があり得るのだろうか!

「… 周囲に生物の気配なし」

「ありがとう、サワタリⅡサン」

おお、ナムサン！偉大なる漆黒の甲冑に身を包んだ戦士、モモンが指を鳴らすと兜がまるで魔法の様に消え失せ、シヤレコウベが現れたのだ！モモンはアンデッドなのか!?

「こんな埃っぽいところ、ナザリックの支配者たる御方々が逗留されるような部屋じゃありませんよ！全く！」

フィオが憤懣やる方なし、といった様子で今さっきシヤレコウベの素顔を現したモモンに言い募る。

「フィオ、止しなさい。私達はここでは駆け出しの冒険者なのだからな。」

威厳に満ちた声でモモンが言う。どうやら彼がこのパーティー、彼の言うところのアインズ・ウール・ゴウンのリーダーのようだ。或いは彼が、危険極まりないニンジャウエポン所持者の雇い主なのだろうか？

「我々は現地社会を調査するにあたり、偽装身分としてまずは冒険者の中で名を上げなければならぬ。その為にはこのような場所に滞在するのも必要なのだ。何しろ駆け出しだからな」

モモンのシヤレコウベにある虚ろな眼窩に、妖しい光が点る。

「なるほどー」

「ところでモモンⅡサン、もう少し設定を詰めないか？」

編笠の男、サワタリがベッドの一つに腰掛けながら言う。

「良いですね！では、まずは私から。私はモモン、二刀流の重戦士でアインズ・ウール・ゴウンの一派のまとめ役の男。かつての仲間が散り散りになり、今は皆故郷でそれなりの立場についていて、私達だけが戦いの道から抜けられずに放浪しているって感じですよ！」

設定という形にはしているが、この言葉の中には紛れもないモモンの本心が含まれている事をサワタリは感じ取った。しかし、奥ゆかしく、その事には言及しない。

「じゃあ次は俺だな。俺は元軍人の傭兵サワタリ。格闘戦教官だったこともあり、ベトナム戦争に従軍、未だにそのトラウマに悩まされて

いる。得意な武器は短剣でレンジャー適性がある。モモンはサンとの関係は、長年の戦友であり且つ雇い主と被雇用者でもある。フィオは格闘戦の生徒、弟子ということだ」

「良いですね良いですね！何だか昔懐かしのTRPGやってるみたいだ！」

モモンが楽しげだ。ネオサイタマでの神経を酷使するサラリマン生活でニューロンにダメージを負っているために、未だにあの病気が治っていないユグドラシル・プレイヤーめいて、嬉々として新たな設定を考え出してゆく！

「あの一サワタリ様！何かお辛い事があるなら私が取り除くお役に立てないでしょうか？その…サワタリ様は私のセンセイですし！」

身を乗り出して、鼻息も荒くサワタリに語りかけるフィオ。設定を本気に行っているのだ。カワイイヤッター！

「フィオチャンカワイイヤッター！」

「フィオチャンカワイイヤッター！」

ハイ・タツチ！サワタリとモモンは手を打ち合わせた！

「アイエツ！」

「フィオ、心配してくれてありがとう。だが、何も問題無い。俺は大丈夫だ」

サワタリのゴツゴツした手がフィオの頭を撫でると、フィオははにかむように笑った。

「フィオについては、そうですね…私達の友人の娘で好奇心旺盛。外の世界に憧れていて、たまたま旧友に会いに来た我々についてきて、家出したようなイメージですかね」

「で、俺が色々仕込んでいると。その過程で獣と意志疎通が可能だったり、タイムに特化したような才能が明らかになると。」

「そういうわけです。徐々にロールの方向性が定まってきましたね。」

「ああ。フィオもそのように振る舞うんだぞ。」

「ハイ！」

こうして、ロールの方向性も定まったモモン一行は宿を後にし、エ・

ランテル冒険者ギルドに足を運ぶのだった。

(文字が…読めない！)

キャバーン！今明かされる衝撃の真実！モモンは文盲なのだ！だが、これには実際深い理由が在るのだ。備えよう。

だが、張り出されている依頼の紙が読めなくては仕事は出来ない！どうするのだ、モモン！

「モモン！サン、俺は学が無いからよお、文字読めないんだわ。というわけでヨロシク！」

(アイエツ丸投げ!?でも、俺はギルド長だ！任せて下さいよ！)

モモンはおもむろに一枚依頼の紙を剥がすと、受付嬢につきだした。

「この依頼を受けたい」

「申し訳ございません。この依頼はミスリル以上の位階の方でないといけない事は出来ないものでして…」

KABOOM！モモンが否定の言葉を聞くやいなや、受付のカウンターにガントレットを叩き付けた！

「我々は故国ではそれなりの戦士だった。この装備は見かけ倒しではない。分かりますね？ただの銅プレート冒険者がこのような装備を身に付けていますか？おかしいと思いませんか、あなた？」

畳み掛けるようなモモンの威圧的言葉の羅列！

「アツハイ。でも規則ですので…申し訳ありません」

奥ゆかしく一礼し、それ以上は何も語らない。

「そうか…仕方ないな。では、銅のプレートで最も難しい依頼を見繕ってもらえるかな？」

「ハイ！ヨロコンデー！」

(アインズ・ウール・ゴウンヤッター！目論見通りだぞ！俺は実際ちのう指数が高い！ですよ、たっち！サン?)

モモンの脳内で純銀の聖騎士がサムズアップしている。ゴウランガ！モモン！

「でしたら、我々の仕事を手伝いませんか？」

喜びに水をさされたような気分になり、モモンがドスのきいた声を

発する。

「ナンオラー？スツゾコラー？」

「初めまして。私が〈漆黒の剣〉のリーダー、ペテル・モークです」

モモン達に声を掛けてきたのは、冒険者チーム〈漆黒の剣〉。一見して、あの黒人ヤクザめいたスミス達よりかは腕が立つであろうことは、手入れの行き届いた装備、立ち振舞いで明らかだった。

「あちらがレンジャーのルクルット、彼はドルイドのダイン・ウッドワ
ンダー、そして魔法詠唱者にしてチームの頭脳！ニニヤ・ザ・スペル
キヤスター！」

「ペテル、その恥ずかしい二つ名止めましょうよ」
「止めません」

モモン一行はギルド内の歓談スペースにてペテルのメンバー紹介を静かに聞いていた。いかにも善良そうなのがペテル、大柄な髭面の男がダイン、軽薄そうなのがルクルット、小柄で可愛げのあるのがニニヤ、とモモンは顔と名前を一致させていた。

「ニニヤ！サンは二つ名持ちなんですか？」

「そ！タレント保持者で天才って言われてるんだぜ、こいつ」

「それはすごい」

（タレントか…これはユグドラシルには無かった要素かもな。何か困ったらタレントで押し通すのもアリか…）

「まあ、エ・ランテルにはもつと有名なタレント保持者がいますけどね」

ニニヤの言う有名なタレント保持者、これはモモンの興味を惹いた。一体、どのような異能力なのか。

「ほう？それは一体？」

「バレアレ氏であるよ」

「バレアレ？」

モモンの疑問に答えたのはペテルだ。

「名の知れた薬師の孫で、ありとあらゆるマジックアイテムが使用できるところですよ」

「それは…」

「モモンⅡサン」

「うむ」

モモンとサワタリの考えることは同じだ。このタレント、間違いないユグドラシルのシステムには無かった要素を多分に含んでいる。ユグドラシルには装備制限が確かにあったし、今も適用されている。モモンは一瞬、タレントを奪う手段が無いか考えた。

「ところで、仕事の件なんです。街周辺のモンスターを狩るんです。協力してもらえますか？」

「ヨロコソデー」

「…モモン殿、一時とはいえ共に旅をするのであるから、お顔を拝見してもよろしいか？」

ヒヤリ！ハット！モモンの兜の下はシャレコウベではなかったか？これはあまりにもアブナイな問いかけだ！

(オイオイ、モモンⅡサンヤバいぞこれは)

サワタリの額にじっとりとした汗が滲み出る。

「そうですね。これで良いですか？」

バイザーを上げたモモンの素顔は実際東洋系で、〈漆黒の剣〉のメンバーからすれば異国情緒を感じる、つまりは遠くから来た人なのだという思いを強めるものだった。

「意外に年いってるなあ」「ルクルット、シツレイですよ」「かたじけない」

ゴウランガ！モモン！あらかじめ幻術を発動させておいた事が有利に働いたのだ。サワタリは額の汗を拭い、安堵の息を吐いた。

「では、早速出立しましょうか！」

気配と視線を感じたサワタリが後ろを振り向くと、何故か受付嬢がモモン一行の方を凝視している。何やら依頼の応対をしているようだが、これは一体？

「あの、アインズ・ウール・ゴウンの皆さんにご指名の依頼が…」

小走りに近付いてきた受付嬢の言葉に、卓を囲んでいた7人に衝撃が走る。銅プレートのパーツィーに指名依頼？ 依頼者はイデオツトか、或いは悪意持つ者か。

「ドーモ、初めまして。僕が依頼者のンファイア・バレアです。」
受付嬢に続いて現れたタレント保持者は、両手を合わせて深々とオジギした。

エ・ランテル郊外巨大墓地内の霊廟に、納められた棺の一つに何らかの操作を加えている黒ローブの女がいた。墓荒らしだろうか。

「ふんふんふふん、ふんふふん」

いや、違う。女が操作した棺が横にスライドし、地下への階段が出現する。

「ドーモ、カジツチャンいるー？」

螺旋階段を降りきると、そこには邪悪なるレリーフが刻まれた祭壇！これは一体!?

「ちよつとそのアイサツは止さないか。我らヘイツキ・ズーラーノ・ウチコワシ」の名が泣くわ」

そう、彼らこそ邪悪なるアンタイセイ秘密結社ヘイツキ・ズーラーノーン・ウチコワシ」なのである！彼らは流民や貧民、中産階級市民へのアジテートや上流階級へのテロ、大規模魔術的破壊行為等で知られる恐るべき集団で、ここエ・ランテルの地下にもその拠点が広がっている。

「もう、つれないなー イイモノ持ってきてあげたのにさ」

意外！それは叡者の額冠！

「そつ、それは！叡者の額冠！スレイン法国の秘宝ではないか！」

「そだよー 可愛い女の子がね、こーんな変なものしててさあ似合わないから外してあげたんだよねー」

彼女はクレマンティヌ。スレイン法国最精鋭の部隊、漆黒聖典の

裏切り者だ！

「そ・し・た・らあ、これがビツクリ！発狂しちゃいましたーぱちぱちぱちー」

おどけたように拍手するクレマンティーヌ。 邪悪！

「何を分かりきったことを。 何にせよ適合者のいないそれはガラクタよな」

「ぶーぶー、ガラクタはひどいぞー」

「そのアイテムを使えるのは100万人に1人。 漆黒聖典を裏切つてまで奪ってくるアイテムではないな」

「まあ、それは置いといてさ。 本題なんだけど協力しない？」

「協力だと？」

「そ。 この街にはどんなマジックアイテムでも使えるタレント保持者がいるんでしょ？」

その時革命的邪悪魔法詠唱者カジツチャンに邪悪な閃きが走る！

「閃いたぞー！そいつを拐ってアンデスアーミーを使用させるのだな！それであれば死の祭典を前倒しに行うことも出来よう！」

「そゆこと。 どうかなー？ 同志カジツト・デイル・バダンテールⅡサン？」

「デイルは止せ。 その名は捨てた、だが同志クレマンティーヌⅡサンの発案は非常に革命的で素晴らしい。 反動的小ブルジョアどもに我らの革命精神を思い知らせ、またワシの目的も達する事が出来るだろう」

「まあ、私はこの組織にとつてはゲストだし、革命には興味無いんだけどさ。 このクレマンティーヌ様に敵対したらどうなるか思い知らせてやりたくてさあ・・・」

このクレマンティーヌという女は、先日スレイン法国の精鋭部隊・風花聖典からの追っ手を皆殺しにしたばかりであった。

カジツトは邪悪に微笑み、クレマンティーヌはさながらニンジャめいて、より邪悪に微笑んだ。

ナム帰りの男がカルネ村を訪ねるようです

「あああ… モモンガ様、モモンガ様、モモンガ様あ。何故ですか、何故私ではなくアウラをお連れになったのですか…？」

一糸纏わぬアルベドの頬を、熱い雫が伝って落ちる。モモンガのセッコめいた死の香りも大分薄くなってしまうた寝台に一人、アルベドはいた。

「何故私も連れていって下さらないのですか？ 四人でも良いではありませんか… アウラは今頃、至高の御方が御自ら考案された偽名で呼ばれ、至高の御方から戦いの手解きを受け、唯一人至高の御方にお仕えする幸福を味わっているのでしょうか…！ 憎い！ 貴女が憎いわアウラ！」

モモンガの枕に頭を何度も叩きつけ、美しい足をジタバタと動かし。その傍らではモモンガを象った抱き枕が虚ろに、アルベドの恥態を眺めていた。

「アルベドは寂しゆうございます… モモンガ様あ… ううう… 思えば下等生物の村に行幸なされた際もセバスを連れていき、私はナザリックに帰され、待機を命じられたわ…」

そこに扉をノックする音。やや強めの三回。デミウルゴスだ。「デミウルゴスです、入室致します… 君は何をしているんだいアルベド？」

「あらデミウルゴス。モモンガ様がお戻りになられたら、私の匂いで包んで差し上げようと思って…」

なるほど確かに、最近ではモモンガ様がフートンで横になる事も増えているようだったな、とデミウルゴスは無言で首肯し納得した。以前デミウルゴスがモモンガの私室を訪ねた際も、安らぎフートンで憩っていた事を思い出したのだ。

「それは良い考えかもしれないね。いくらモモンガ様がご自身で現地社会の情報を集める事を望んでおられるとはいえ、程度の低い者共と交わってお疲れでしょうから。」

「そうよね！貴方も良い考えだと思っわよね！」

デミウルゴスは奥ゆかしく、泣きはらしてやや赤くなったアルベドの眼については触れなかった。一仕事終わるとモモンガの寝台で涙を流している事は知っている。だが、モモンガがいない今、根本的な解決は叶わない。デミウルゴスは自分に来れることを行うつもりだった。

「そういうえば、例の警備の件だが非常に順調だよ。私だけではこうも上手くいかなかったらどうね」

「まあ、モモンガ様もお喜びになるわ。貴方もお疲れ様、デミウルゴス」

モモンガの身の安全を完全に確保する。何の憂いも悲しみもなく、ナザリックで心安らかに過ごしてもらうため、アルベドは何でもするつもりだった。モモンガを悲しませるモノ、不快にさせるモノなど不要だ。そんなモノは排除しなくてはならない。

「いやいや、貴女ほどではありませんよアルベド。モモンガ様もアルベドがいるから安心してナザリックを離れる事が出来ると、仰っていましたしね」

アルベドの反応は劇的なモノを見せた。薄手のフートンをその魅力的身体に巻き付けると、デミウルゴスの鼻先まで近付き、問い質した。

「本当に！モモンガ様がデミウルゴスにもそう仰っていたの？」

アルベドは自らの主君の優しさを知っている。だからこそ、モモンガに誉められれば天にも昇る心地になれるが、一点の染みめいて不安が付きまとうのだ。モモンガは優しい。慈悲深い。かつての仲間達の離反も笑顔で赦し、送り出したほどだ。だからこそモモンガの優しさに付け入るような真似は許さないし、許せない。自身にも他人に対しても。

モモンガだけを愛し、崇拜するアルベドが何故途中からアインズ・ウール・ゴウンの覇道に加わったサワタリを尊敬し、支配者の一人として礼節をもって迎えるのか。その理由がこれだ。サワタリは1500人の不埒者からモモンガを守り抜いた歴戦の勇士であること、そ

してモモンガの優しさを利用しなかったこと。この二点こそアルベドがサワタリを支配者として迎え、その前に平伏する理由だ。此方の世界に来てからも、キテレツな発言は多くとも、常にモモンガの一步後ろで背を護るように控えるサワタリの姿にアルベドは共感していた。貴方様もまた、モモンガ様の優しさをよくよくご存知で、それを護りたいのですね、と。貴方様と私は同志なのですねと。

或いは、モモンガ様を最も、心から、世界の誰よりも、かつての間達よりも、何よりも愛していてその御心を理解しているのは私だけけれど、モモンガ様の優しさと友情の深さを最も理解しているのは貴方かもしれませんね。という、奇妙な親近感と共感が、加えてサワタリの半神的ニンジャ存在感が混ざりあって尊敬の念になっていた。

そして、この深い深い愛情と複雑な感情がアルベドに涙を流させるのだ。この深い愛情こそが、モモンガに与えられた愛こそが、アルベドの感じる寂しさの原因なのだ。より近く、より長い時間、より濃密に、モモンガに寄り添いたい。これが女としてのアルベドの願いである。

「ああ、無論本当だとも。モモンガ様は確かにそう仰っていたよ」

嘘だ。モモンガはアルベドとデミウルゴスのお陰で、とデミウルゴスに言ったのだ。だからこれは優しい嘘だ。

「どんな強固な砦も波状攻撃を食らえば陥落する、モモンガ様も敬意を払うミヤモト・マサシという人物が遺したコトワザだそうよ。シャルティアがいない内に、モモンガ様との距離をつめるつもりなの！」
「ははは、元氣になったようで何より。まあ… とりあえず目元には注意したまえよ」

アルベドは自分がどういう状態だったか気付き、赤面した。

「… ありがとう、デミウルゴス。気を使わせたわね。」

「構いませんよ、守護者統括殿。では、失礼」

デミウルゴスは微笑むと、冗談めかして優雅に一礼した。悪魔らしからぬ優しさ、いや、悪魔だからこそ心の機微というものを人一倍理解しているのかもしれない。この悪魔はナザリツクの者には非常に優しいのだ。

「カルネ村へ向かうにあたって、ちょうどこの辺りからモンスターが出没するようになるので、注意してくださいね」

殿につく三人の方に振り向いてペテルが言う。街道が森林沿いに有るためだ。

「なーに、奇襲でも受けない限り心配することねえって！俺の野伏感知力は最高だからなー！」

「ルクルットⅡサン、ナムの密林では無駄口の多い者から死んでいくぞ」

サワタリのナムめいた狂気は、纏うアトモスファイアと相まって凄まじい説得力を發揮した。

「アツハイ」

ルクルットが返事をしたその次の瞬間！

「小隊戦闘準備イー！」

サワタリのよく通る声に反応し、モモンは抜刀、フィオも鞭をしごき、各々が得物を構える。ルクルットの鼻と耳もサワタリに遅れること5秒、モンスターの気配を感知する。サワタリの脳内にワルキューレの騎行！ナパーム掃討開始！

「ARRGhhhhhh！」

オーガとゴブリンのエントリーだ！

「サイゴンー！」「アバーツ！」

構える隙も与えぬカラテ突進！右のマストダイ・ブレイドの一撃！ゴブリンは頭蓋骨貫通死！

「イヤーツー！イヤーツー！イヤーツー！」「アバーツ！」「アバーツ！」「アバーツ！」「ルクルットが素早く弦を引き絞り、矢を放つ。ブルズアイ！それぞれの矢がゴブリンの頭蓋骨貫通！ワザマエー！」

「イヤーツー！イヤーツー！」「アバーツ！」「アバーツ！」

ペテルのイアイ斬撃！回転切りでゴブリンの首を切り落とす！安定感のあるイアイドだ！右手に左手に剣を持ちかえながら戦うことによって、ゴブリン達は翻弄されている。ゴウランガ！

「ARRGhhhhhaaa！」

アブナイ！オーガがニニヤを狙っている！ペテルがモモンに向かって叫ぶ！

「モモン！サン、援護を…！」

だが、その必要はなし！

「イヤーツ！イアイド！」「A、a、アバーツ!？」

欺瞞！モモンにイアイドの経験はない！だが、レベルによる凄まじい身体能力で振り回される大剣はまるで殺人風車だ！

「な、なんてワザマエなんだ！オーガを一撃!？」

「ビュー、モモン！サンやるう！さて、サワタリの旦那は…！」

サワタリの援護をするべく最後のオーガに向かって矢を射かけるルクルツトだが、サワタリがいない。

「イヤーツ！あれ、サワタリの旦那は?」

オーガの影から何かが泥を掻き分けるようにして勢いよく飛び出す！おお、あれはまさか！

「Wasshoi!!」

ゴウランガ！オーガの影へ潜んでいたサワタリがバックスタブめいてオーガの首をケジメ！一秒間に50回転以上を実現している！両手のマストダイ・ブレイドはまるで血風独楽！そして鮮やかに着地をキメる！

「ワザマエ！」

「サワタリの旦那はもしかや忍者なのでは?」

「ニンポであるか?」

ニンポとは忍者が用いるニンジャ・マジックのことである。有名なものではカミナリ・ニンポやブンシン・ニンポなどが存在する。王国の子供たちにもカミシバイ・カートウーンで有名なニンジャ仮面シリーズは大人気である。そのグッズ経済効果は金貨何千枚とも言われており、子供たちは皆、こぞってヌンチャクをほしがるものである。

ンファイレアとその馬車に襲撃してきたモンスターは一体の例外もなく息の根を止められた。ものの数分もかからずに、だ。漆黒の剣の面々は、モモン一行の銅プレートらしからぬ実力に驚きを隠せなかった。

「お強いとは思っていましたが、まさかこれほどは！」

「そんなことないですよ」

モモンがサラリマンめいて謙遜の言葉を口にする。

「ルクルットⅡサンやニニヤⅡサン達の的確な援護も素晴らしかったな」

ニニヤが目を輝かせて言う。これはニニヤが英雄というものに強い憧れを感じている事の証左である。

「私はなんも出来なかったな」

フィオは肩を落とすし、ややしょんぼりしている。だがこれは、不自然にならない程度にモモンとサワタリがモンスターを通さないようにしているためなので、実際仕方のないことだ。

「いのいの。フィオちゃんはまだ子供なんだからお兄さん方に任せときなさい！」

「…はい」

ルクルットがサムズアップ！だがルクルットよ、お前の目の前にいる褐色エルフ元気娘存在はお前を殺すのに数秒とかからぬ。ナムアミダブツダ！

「やはりあなた方に護衛を頼んだのは正解でしたね」

「ンファイレアⅡサン」

「薬草の採取がてら、知り合いの様子を見にカルネ村へ行きかけたのですが中々頼れる方もおらず…オカゲサマデス！」

ンファイレアは深々とオジギ。当然馬から降りている。

「いえいえ、オセワニナツテオリマス」

オセワニナツテオリマスとは、オカゲサマデスの対になるチャントであり、七大神が伝えた奥ゆかしい礼節プロトコルだ。互いが互いに敬意を払っているという事実が、このチャントを行うことで明示的になるのだ。なお、モモンは反射的に行っている。

「しかし、思っていたよりもモンスターの数が多くありませんね？」

「この辺りは森の賢王と呼ばれる強力な魔獣のテリトリーなんです。だから、他のモンスターもあまり近付かないのでしょうか」

「森の賢王…」

「フィオ、出番だな」

「ハイ！センセイ！」

捕らえる事が出来れば、ナザリックの強化に繋がるはず。モモンは、モモンガとしてそう思考した。そして、一瞬フィオがビーストテイマー・アウラの顔付きになり妖しい笑みを浮かべて唇を舐めた。

辺りも薄暗くなり、当初の予定通り野営の支度を終えた一行は、夕食の鍋を囲んでいた。干し肉やタマネギの類をコンソメブロックめいた何かで煮込んだものだ。冒険行の最中の飯にしては、中々に豪勢なところがあった。流石は銀プレートといったところか。ルクルットは見た目通りの器用な男で、火を起こす薪集めから料理まで、ほとんど一人でやってしまった。

「はいよ」

ルクルットが碗を差し出す。

「ドーモ」

(食事、必要ないんだけどな……)

「なあなあ、三人は結局どんな関係なの？」

ルクルットがいかにも好奇心に満ちた瞳で訊ねる。ニニヤもまた、瞳に同じような色を宿している。

「そうですね……私と彼は長年の戦友です。それこそ10年来の関係です。フィオはご覧の通り、好奇心旺盛な子で……友人のもとを訪ねた私たちについてきてしまったのです」

「えへへ……」

モモンの発言に合わせて、恥ずかしそうに笑うフィオ。名演技だ！「なるほどなあ……しっかし何でまた旅なんて続けてるんだ？元々冒険者だったのかい？サワタリの旦那は傭兵なんだろうけどさ」

「ルクルットさん……それ以上の詮索は止めていただけませんか」
モモンの言葉に頭を下げるのはペテルだ。

「ルクルットのバカ！ウカツ！失礼だろ」

「悪い悪い。ドーモ、スミマセン」

ルクルットはヘラヘラと笑いを浮かべているが、不思議と腹は立た

ない。むしろモモンは、ルクルットの人柄も相まって、三人で考えた設定を若干のミステリアスかつワケアリな雰囲気を漂わせながら開陳できたことに喜びを感じていた。実力のある正体不明の剣士存在、かなりクールだ。

「ところで、皆さんは漆黒の剣というチーム名ですがどんな由来があるんですか？」

ルクルットはその質問に、ヘラヘラ笑いをニヤニヤ笑いに変えて答えた。

「それはな、ニニヤが欲しいって言ったからなんだよ」「ほう？」

「止めてください、若気の至りです」

ニニヤが赤面し、そっぽを向く。

「えっと…漆黒の剣というのは、昔いらつしやった十三英雄の一人が持っていたとされる四本の剣にちなんでるんです」「なるほど」

「そうそう、それを発見するのが俺たちの第一目標ってわけさ」

ルクルットはどこか誇らしげに彼らの目標を語った。そこからは、彼らの育んできた信頼関係が窺えるかのようであった。

「だから若気の至りなんです！勘弁してくださいよお…」

「何も恥じることなど無いのである！夢を大きく持つことは重要である！」

そう言ってダインは豪快に笑った。

「本当に皆さんは仲がよろしいようだ。私も昔を思い出します」

モモンのポツリと溢すような言葉にニニヤが反応する。

「モモンⅡサン達のアインズ・ウール・ゴウンにも他のお仲間が？」

「ええ、40人も素晴らしい仲間たちがいきました。本当に…最高の友人たちでしたよ」

ペテルは思わず息を呑んだ。彼並みの戦士達が40人も？それでは、モモン達のアインズ・ウール・ゴウンは相当に偉大な戦士団だったのではないか。この国の戦士団など目ではないほどの。ますます

モモン達の素性が気になるところではあったが、ペテルは何とかグツとこらえることに成功した。

「いつの日かまた、その方々に匹敵するような仲間が出来ますよ！」

幻聴だが、サワタリにはニニヤがモモンの地雷を踏んだ音がはつきりと聞こえた。

(アイエツ!?それはアブナイだぞ、ニニヤ!!サン!)

サワタリの額にじっとりとした汗が浮かぶ。

「そんな日は、来ませんよ。この先もずっとね。」

明らかに先ほどよりも重々しく、そしてやや怒りと寂しさを滲ませた声だった。

「失礼、私はあちらで食べてくるとしよう」

「じゃあ私もー」

モモンに続いてフィオが離れていくと、サワタリが冗談めかして言う。

「悪いな。うちの大将は少しナイーブなんだ。」

去り際に見た、ニニヤの悲しげな表情がサワタリにはやけに印象的だった。ニニヤもまた、大切な誰かとの別離を経験しているのだろうか。

エ・ランテル貧民街。屑の掃き溜め、貧民街の中でもこのストリートは一際である。裏路地には実際ゴミ溜めめいてすえた臭いが漂う。しかし、今宵はそれに加えて血とアンモニアの臭いが混じっていた。「んふふふふー これからお兄さんにインタビューするからねー」
邪悪な女戦士クレマンティーヌは、情報屋の男を路地の隅に追い詰めるように宣言した。

「アイエエエエ!?これ以上は何も知りません！」

「んふふー 先ずは貴方の小指を折る。イヤーツ！」「グワーツ！」

情報屋の男は激しく失禁！腰を抜かしながらも後ずさる。

「アイエエエエ!?これ以上は本当に何も知りません！」

「んふふー 次は貴方の薬指を折る。イヤーツ！」「グワーツ！」

「アイエエエエ!? これ以上は本当に、本当に何も知りません!」
「んふふー 次は貴方の中指を折る。イヤーツ!」 「グワーツ!」

情報屋の男はもはや排泄物を垂れ流しにしている!

「アイエエエエ!? これ以上は本当に、本当に何も知らないんですよ!」
「んふふー 次は貴方の人差し指を折る。イヤーツ!」 「グワーツ!」
情報屋の男はもはや垂れ流すものすらない!

「ところでなんだけどー 先ほどまでの拷問には特に意味はありませんでしたー」

何が嬉しいのか上機嫌に笑うクレマンティヌ。 邪悪! 情報屋の男は考えることも放棄して、声を枯らさんばかりに悲鳴を上げた。なぜ、何故自分がこんな目に合うのかという思いを込めて!

「アイエエエエ狂人!? アイエエエエ!」

「そう、私ね、狂ってるの! 人を殺すこと、拷問することに狂おしいほど恋しちやってるのお! だから仕方ない... 仕方ないよねー」

「アイエエエエ! アイエエエエエエエ!」

「何でこんなになっちゃったのかな? 仕事で人を殺し続けたから? 親の愛情が糞兄貴にばっか注がれていたから? 弱かった頃に無理やりサレたから? 任務でドジって糞野郎に焼けた鉄の棒突っ込まれたから? お兄さんわかる?」

「アイエエエエエ、アイエエエエエエエエ!」

這ってでも逃げようとする男を、なぶるように、一歩ずつブーツの音を高らかに鳴らしながら追い詰める。

「わからないよねー! だって、全部嘘、嘘、嘘、嘘、嘘だもーん!」

「アイエエエエ!? アイ、」

「飽きた。」

すると唐突に、カラテシヤウトも無しに、クレマンティヌは這いつくばる男の心臓をチョップ突きで貫き、引き摺り出した。そして僅かな間、心臓の鼓動を楽しむと躊躇いなく握り潰した。

「んふ、んふふふふ、んふーふふふふふー アーイイイ... 凄くイイ... この為に生きてるのお... イイ... 凄くイイ... うえひひひひ!」

彼女はここで一度達した。

貧民街の裏路地にクレマンティーヌの不気味な笑いがこだまする。心臓を握り潰された男の虚ろな瞳がただただ絶望とともに、恍惚の笑みを浮かべて痙攣するクレマンティーヌを見上げていた。月明かりも無いような夜だ。ブツダも寝ているのだろう。

キリンググフィールド・ベトレイヤー

「囲め！前衛はとにかく囲んで棒で叩け！まだ魔法を使用できる者とはとにかく弾幕を張れ！奴を近付けるな！」

ウシミツアワー、エ・ランテル近郊。普段は何の変てつも無い緑の絨毯が広がる草原は、今宵熾烈なイクサの開始点と化す！

囲む側はスレイン法国の誇る精鋭、風花聖典の反逆者追討部隊。

囲まれているのは一人。しかも、軽装の女戦士だ。ビキニめいた鎧で豊満なバストとスラリとした魅力的肢体を見せてつけている。彼女はクレマンティーヌ。スレイン法国の最精鋭部隊、漆黒聖典第9席次だった女で、今は人類の敵と言っても過言ではない存在だ。

彼女は既に出奔する際に、叡者の額冠を奪い巫女姫を発狂させた他、100名を優に越える神殿のバトルボンス達を皆殺しにしている。

また、エ・ランテルまでの道すがら、行き掛けの駄賃とでも言うつもりかスレイン法国の一般市民や治安部隊の人間を数多く手に掛けていた。彼女のキルレートは300を越えていた。クレマンティーヌが爆発させた殺人衝動と拷問欲求は、法国に凄まじい被害を与えた。

スレイン法国が打撃を受けるということは、人類の生存圏維持という崇高な使命に何らかの不都合が生じることに繋がる。即ち、クレマンティーヌは人類全体の裏切り者であり、かのズーラーノーン・テツオに匹敵するパブリックエネミーなのだ。

「んふふー あんたらサンシタがいくら居たってえ、このクレマンティーヌ様に敵うわけないじゃあん？お分かりー？」

撃ちかけられる魔法を避け、時には風花聖典隊員の死体を盾に、次々と魔法詠唱者を殺戮していく。

二刀のステイレットが閃けば、次の瞬間には一人は喉元を貫かれ倒れている。クレマンティーヌ追討部隊は半ば恐慌状態に陥っていた。

魔法詠唱者を守るべき前衛はクレマンティーヌと一合も切り結ぶ前に殺され、或いはそもそもクレマンティーヌの速度についていくこ

とすら出来ないのだ。風花聖典の戦線は崩壊していた。

「〈流水加速〉〈超回避〉〈四光刺突〉イヤーツ！」

ぬるぬると低空を這うように進むクレマンティヌを狙い撃つことは極めて難しい。ホノオ・ノ・アメを唱えようとした魔法詠唱者は正中線に四つの大穴をあけられ、絶命した。

(バカな… 我々は風花聖典の中でも選りすぐりの20人だぞ!? 奴はニンジャか!?)

「ほらほらほらほらア! あんたらの生命線、魔法詠唱者の皆が死んじゃうよー? いいんでちゆかー?」

前衛の喉元をステイレットが貫通! 同時に二人も!

「マジックアロー! マジックアロー! マジックアロー! マジックアロー! イヤーツ!」

マジックアローを24本、6本一組にして立て続けに打ち出す。追討部隊の隊長は熟練の魔法詠唱者だった。当たればただでは済まない威力のマジックアロー!

だが、当たらない。

「〈能力向上〉〈流水加速〉イヤーツ!」

ああ、また前衛の隊員が二人倒れた! 最早クレマンティヌ追討部隊は隊長を含めて数人という有り様だった。

「ホノオ・ノ・アメ!」

「マジックアロー!」

「バインド! マジックアロー!」

一糸乱れぬ集中砲火だが、クレマンティヌは温存していたステイレットの蓄積魔法を使用! 僅かに傷を負うも、その殆どを相殺! そして最後の前衛を刺殺し、盾にする。ゴ、ゴウランガ! C L E M E N T E I N !

「あ、ああ、ああ嫌だ! 死にたくない! 死にたくない!」

魔法詠唱者の隊員達は、時間稼ぎにすらならず打ち倒されていた。残すは隊長のみだ。

「あれあれー? 最初の威勢はどこにいったのかなー?」

クレマンティヌが一步進む。隊長が後ずさり、何の窪みも無い場

所で転倒し、それでも後ずさる。クレマンティーヌがゆっくりと一步の間合いを詰める。

「ひいっ…!?来るなっ、来るなあああ!」

既に追う側と追われる側は逆転していた。

「んふふー あのね神様は居ないの。あなたは私に拷問されて無惨に死ぬ。ちよつとずつ顔の皮を剥ぐんだあー いいでしょ?」

良いわけがない。腰が抜けて立てない男がひたすら後ずさる。

「イヤァッ!」 「グワァッ!」

クレマンティーヌは待ちきれないとばかりにステイレットを男の右足に突き刺し、地面に縫い止めた。

「イヤァッ!」 「グワァッ!」

クレマンティーヌは最早辛抱ならないとばかりにステイレットを男の左足に突き刺し、地面に縫い止めた。

「奇跡も魔法も、無いんだよー」

「いや、あるね」

その時、隊長の男がもつトンファアから眩い光が!これは一体!?!そして今までの醜態は演技だったのだろうか。いや、彼はいざというときには自爆覚悟で魔法武器の蓄積魔法を使用するよう自己暗示を掛けていたのだ!

「ナンオラー!」

「アバヨ、裏切り者!地獄で会おうぜ!」

トンファアに込められた魔法は龍雷、それも使用すればトンファアが自壊するような最大強化された龍雷だ。そして、魔法の込められたトンファアが二本!これはクレマンティーヌをも殺し得る威力!

「離せ!離せ!ザッケンナコラー!」

「死ね!クレマンティーヌ!!サン死ね!」

顔を近付けて煽っていたクレマンティーヌは、死を覚悟した男のヤバレカバレの筋力で捕らえられていた。勿論、あと5秒も有れば振りほどけるだろうが、魔法の発動にはそれで十分足りるのだ!インガオホー!

二つの龍雷が男とクレマンティーヌを貫き、焼き焦がす!

「ンアーツ！ンアーツ！アバババーツ！」

「アバーツ!？」

凄まじい土煙が上がり、二つの死体を覆い隠す。

土煙の中、男は肉が焦げる強烈な臭いを嗅ぎ、最早嗅覚が在るかも分からないが、ニヤリと笑った。本国の腕利きの魔法詠唱者達が、完璧なトランス状態によって連携して詠唱し封じ込めた高位魔法は裏切り者を仕留めたようだった。男は自分と部下たちの挙げた成果に満足し、逝った。

クレマンティーンを龍雷が貫いた瞬間、彼女が感じたのは痛みではなく激しい怒りだった。

（私はクレマンティーン様だぞー！こんな、こんなファツキンサンシタ野郎と相討ちになって良いわけがないツ！私は！クレマンティーンだ！）

その時、彼女は生死の狭間で遙か上空に浮かぶ黄金立方体を見た。オヒガンの向こうから、何か強大な存在が彼女を見ているのが分かる。クレマンティーンは激しく怒り狂った。

（何見てやがるツカラー！ザツケンナ、ザツケンナ、ザツケンナカラー！）

突如としてクレマンティーンを襲う浮遊感。だが不快な感覚ではなかった。クレマンティーンは怒りを湛えたまま、全身の力を抜き浮遊感に身を任せた。彼女ほどの戦士になると感情と肉体の連動を制御するのは容易だ。

そして気が付いた時には、彼女だけが草原に立っていた。彼女は勝利者だった。無惨な黒焦げ死体は、彼女に逆らった者の末路だった。

その時クレマンティーンは自分がニンジャになったことを確信した。そして自分を評価しなかった世界に、自分を愛さなかった世界にアイサツを決めた！

「HELLーO、皆さん。クロス・ニンジャです。私は私がそうしたい時に、皆さんを無惨に殺戮します。拒否権はありません。投降も受け付けていません。刮目しろ！私を見ろ！私こそがニンジャだ！私こそクレマンティーンだ！CLEMMENTEIN！」

礼節！だが、おお、見よ！その瞳は嘲弄の色を宿し、その口元は無能者を嘲笑う形に歪んでいる。この時、クレマンティーヌの世界は二つに別たれた。即ち、ニンジャ(自分)か非ニンジャの屑かである。英雄級のカラテを持つ戦士が、パブリックエネミー存在として位階を上げた結果、彼女はリアルニンジャへと変貌したのだ。

今のこの世界に彼女を止められる者は存在しなかった。

「先ずはカラテだ。ズーラーノーンでカラテ鍛練を積み、その後逆襲だ。法国の人間は皆殺しにして神器は奪う」

彼女は一山幾らのニンジャソウル憑依者ではない。よって万能感に酔うこともない。そこには冷徹な戦士の状況判断があった。

「素晴らしいワザマエだったな。クレマンティーヌさん？」

「デバガメだなんてエッチ！変態！スケベ！」

一瞬にして邪悪な忍者の表情は鳴りを潜め、短距離転移を行使して現れた魔法詠唱者を出迎えた。彼は革命的秘密結社ヘイツキ・ズーラーノーン・ウチコワシンの幹部、十二高弟の一人、カジツトである。「ふふふ……まあそう言うな。同志クレマンティーヌさん。我らズーラーノーンはオヌシを歓迎する。ワシの手に掴まるが良からう。オヌシをアジトに案内する」

「はい、出迎えお疲れちゃん」

クレマンティーヌがカジツトの腕を掴むと、二人の姿は忽然として消えた。そして風花聖典の者たちの死体もまた同じく。彼らの死体はカジツトの邪悪なるネクロマンシーで、邪悪なる企みに利用される運命にあった。ナムアミダブツ！

エ・ランテル地下、イツキ・ズーラーノーン・ウチコワシ訓練ベース。

「革命！」

「闘争！」

「前進！」

「イヤヤヤーツ！」

ハンマーや鎌を手にクレマンティーヌへと襲い掛かったブローラー
ノーン戦闘員達は、瞬く間にクレマンティーヌの放った攻防一体のメ
イアルーアジコンパツソめいた回し蹴りを受けて吹き飛ばされた。

「そこまで！如何だろうか同志諸君。これが同志クレマンティーヌ
サンの実力だ。皆も知つての通り、クレマンティーヌと闘つた
彼らは特に戦闘に長けた革命闘士達だ。その革命闘士達をベイビー・
サブミツシヨンの如く制圧する同志クレマンティーヌとサンは、我が
組織の指導局たる十二高弟に迎え入れるに足る実力の持ち主！私は
そう考え、彼女を推薦する！どうだろうか！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

「承認！」

翻る赤いノボリ！威圧的文言！へ一揆打壊へ共産主義革命だへ市
民連帯感へ前進へ闘争へ総括へ貴族は自己批判重点へ決断的赤色
テロルへなどの文言がシヨドーされたノボリが見守る中、ヘイツキ・
ブローラーノーン・ウチコワシへエ・ランテル支部書記長にして指導局
委員十二高弟カジットの提案は承認された。

鉄兜にゴーグル、フロシキで口元を隠し、メイスやモロトフ・カク
テル、もしくは魔法発動体の杖などで武装したヘイツキ・ブローラーノ
ーン・ウチコワシへ構成員たちが並び、承認の声を上げる。

壁には極めて邪悪な掛け軸！へハラハラ時計へ球根栽培法などの革命的かつ戦闘的シヨドーがされている！

「いつもこんなことやってるのー？大袈裟なんだからあ」

「まあ、そう言うな。エ・ランテル滞在中は同志達にカラテ鍛練でも施してやってくれ。ワシは儀式で忙しくしているでな…それなりに自由にやってくれて構わん」

クレマンティーヌはあの特徴的嘲るような笑いを浮かべると、頷いた。

「カジツチャン話が分かるねー程よく遊んだりトレニングしてる事にするよ。でもまあ、ただのモーターじゃあ殺しても満足出来なくなっちゃったしい？あんまり手間は掛けないよー」

「意外だな」

カジツトは目を丸くして、心底意外だという表情をした。

「んふふ、心境の変化ってやつですかねー詳しくはナイシヨ」

そういうとクレマンティーヌは、構成員に案内させ、与えられた自室へと去っていった。

「惜しいな…同志にして導師たるズーラーノーン・テツオの思想に触れ、より深く理解すれば良い革命闘士になるだろうに。だがクレマンティーヌとサンが同志達の戦闘訓練を担当してくれれば、戦力向上は間違いない、か…それ自体は嬉しいことだ」

カジツトに対して言ったことは嘘ではない、が本当の心情を伝えたわけではなかった。

確かに今は手当たり次第に殺したい、拷問したいという衝動はおさまっていた。しかし、クレマンティーヌの心の中のジンジャ・テンプルでは怒りの炎が今もまだ、いやニンジャになる前よりも激しく燃えている。

自分を認めない兄への怒り、自分を認めない両親への怒り、自分を認めない祖国への怒り、自分を認めない世界への怒り。

要は彼女はグルメになったのだ。最早獲物を選び好みしないと満足出来ないのだ。クレマンティーヌを内側から焦がす炎は、より激し

い抵抗を制圧し蹂躪する事を、そして瑞々しい鮮度の恐怖を求めている。ただの一般人では、殺しても殺し甲斐がなく、彼女の渴きは癒されないのだ。

「イヤーツー！」

クレマンティーンが怒りのままに振るったチョップ突きは、固い岩盤の壁をバターのように貫き、抉った。

「イヤーツー！イヤーツー！イヤーツー！」

一週間後、地下訓練ベース。クレマンティーンは工作部門構成員に製作させた木人にコッポ・コンビネーションを叩き込んでいた。ジンチュウ、アゴ、無防備股関への流れるような連続攻撃。漆黒聖典の者は誰でもある程度の近接格闘術を修めているが、クレマンティーンのコッポ・ドーはかなりのものだった。システムティックで無慈悲な殺人カラテであるコッポは、名誉と人間性を捨てねば研鑽していくことが難しいとされている。

「イヤーツー！イヤーツー！イヤーツー！」

怒りの掌打！木人が半ばよりへし折れ、吹き飛ぶ！

「鍛練にも精が出るな、同志クレマンティーンⅡサン」

「カジットチャンカー」

「ンフィーレア・バレアレがエ・ランテルに帰ってきたそうさ。同志から報告があった」

万感の思いを込めて、カジットは言葉を発した。

「へえ、出番？」

「そうだ。ンフィーレア・バレアレを拉致し、アンデス・アーミーを発動、オヌシはワシの護衛を頼む。革命の為にも、ワシの望みのためにも冒険者だの何だのに邪魔はさせん」

「待ってましたー んふふ、どんなのと戦えるか楽しみだなあ」

クレマンティーンは舌なめずりをした。死の祭典が始まるのだ。

ニンジャ・フィール・ア・デイープセンス・オブ・ア イソレーション

恥の多い人生を送ってきた。物心ついた頃には既に私はクレマンティーンではなく、クインティアの片割れだった。両親の目は常に兄に向けられ、称賛されるのは常に兄の方だった。

およそ私がやることは全て評価に値せず、が両親の基本的な態度だ。私は努力した、しない、或いはある程度の結果を出すことが出来た、出来ないに関わらず常に辱しめられてきた。そして周囲はといえば、人が辱しめられるのが珍しいわけでもあるまいに、畜生に向けるような無遠慮な視線でもって私を冷酷に観察し、晒し上げた。

私は自分の意思や行動に関わらず、恥を上塗りさせられてきた。時には両親の態度、時には兄の目覚ましい活躍、時には周囲の無遠慮な比較によって恥というものを積み重ねさせられてきた。ここで不思議に思うのは、何故彼らは自分をその気になれば数秒でくびり殺せる相手に対してあれほど強気でいられたのかということだ。これはモーターが野生の獣にも、畜生にも劣ることの証明ではないだろうか。

ニンジャになつてからはしみじみと想う。

この環境は私が漆黒聖典に属してからも続いた。周囲にとっては、いつになつても私はクレマンティーンではなくクインティアの片割れらしかった。それはあの兄の方が、法国にとって有用で有能という基準からきた状況判断のようだった。兄は魔物を使役することにかけては天才的と言えた。この群としての兄の実力が個としての私の実力に勝っている、そして私よりも遥かに有用という事を言われた覚えがある。

実に下らない事だと思う。ろくなカラテも無いユニーク・ジツ頼りのモヤシに何を期待しているのだろうか。ニンジャになる前の私でさえその気になれば、あの気取った顔にステイレットを突き込みネギトロにする事は可能だった。

だがその一步を踏み出す勇氣は無かった。ひとえにカラテの不足故だ。確かに兄を殺すのは容易いが、ギガントバジリスクを無傷で切り抜けるのは難しい。それも単純な話だった。カラテの不足故に侮られるならば、ひたすらカラテを積み上げるべし。群に優る個になれば良かった。

そして十分にカラテ鍛練を積んだのなら、不自由極まりないスレイションの後ろ盾など不要だった。かねてより接触してきていたズーラーノーン・ウチコワシが私の当分の間の宿だった。

カジットは熟練の魔法詠唱者で、畑違いの私にもその優秀さは理解出来る。ややアカいのがたまに傷だが中々気持ちの良い男だ。何よりエゴを力で押し通そうとしている事を隠さないところが良い。

カジットが計画する死の螺旋が実行される日は、ニンジャとなり個である事を極めた私の門出の日になるだろう。ようやくクインティアの片割れではなく、クレマンティーヌここに在りと示す事が出来る。

「スウーツ、ハアーツ」

クレマンティーヌは暗闇の中、愛用のステイレットは床板に突き刺しアグラメディテーションを行っていた。この場にサワタリがいればクレマンティーヌの身体の隅々まで行き渡るカラテに、そのハイキントキに息を呑んだだろう。強大なニンジャである、と。

周りにはクレマンティーヌも見知った薬草の束やポーション瓶がある。しかしこの家の主は不在だ。そしてそれは彼らにとって幸運な事だった。クレマンティーヌは狂言ジェット誘拐団めいて、この家の主であり類いまれなるタレント保持者、ンファイレア・バレアレの誘拐の為にこの家を訪れていたのだった。

「お疲れ様です。果実水が母屋に冷やしてあるはずですから飲んでいって下さい」

「そいつはいいねえー！」

(来たか….)

「はあいお帰りなさいー！」

この時、ペテルからはまるでクレマンティーンが影から突然抜け出した様に感じられた。

並々ならぬ殺気！　なのにも関わらず存在に全く気付かせない野伏力！

漆黒の剣の面々は一瞬にしてクレマンティーンが放つニンジャアトモスファイアによつて、その場に釘付けにされた。ンフィーレアについては言うまでもなく、僅かに失禁すらしている！

「アイエエエエ!?!」

「アイエエエエエ!?!ニンジャ!?!」

「ニンジャ!?!ニンジャなのに豊満ナンデ!?!」

「アイエエエエエエエエエエエエエ!?!」

(冒険者みたいだけど、この程度か…。これではNRSから立ち直れる奴が居るかどうか…。つままないの)

「うふふー　今から皆は死ぬわけだけど、一応アイサツはしておくねー？　ドーモ、クロス・ニンジャです。ちなみに目的はこのンフィーレア!!サンね!やつてもらいたいことがあつてさあ」

クレマンティーンは、いや、クロス・ニンジャは口元を三日月めて歪め、無能者のモーター達にアイサツを決めた。

「アイエエエエ…」

ンフィーレアは腰を抜かして後ろに倒れ込んだ。尻餅をつき、後退りすれば床板に失禁の痕跡が現れる。優れた魔法詠唱者たるニニヤもまたクロス・ニンジャから放たれる恐るべきミスティックパワーを敏感に感じ取り、失禁していた。

「ウオオオオオ!」

唐突にペテルがカラテシャウトを発した。いち早くNRS（ニンジャ・リアリティ・シヨック：一種の恐慌状態の事）から脱したペテルが愛用のロングソードを抜き放ち、周囲に檄を飛ばす！

「ニニヤはンフィーレア!!サンを連れて退がれ!」

(ちよつと殺る気…。出てきたかも)

クレマンティーンは心中でひとりごちた。

「でも!」

「拐われたお姉さんを助け出すと言っていたでしょう！早く！」

「んー お涙頂戴だねー？ もらい泣きしちゃうよ、ま、しないんだけどお」

言うやいなやクレマンティーンはスリケンを生成し、ニニヤへと無造作に投げた。

「グワーツー！」

アーチニンジャであるクロス・ニンジャが生成したスリケンは、ニニヤを庇ったルクルットの肩を吹き飛ばしていた。これは射手としては致命的負傷ではあるが、この場においては何より貴重な一瞬の間を作り出していた。

「ルクルットー！」

「行け！ニニヤ！行けーツ！」

「S i k k o k u !!」

更にペテルが勇気を振り絞り、大喝と共にクロス・ニンジャへと斬りかかる。

「熱いねえ！そういうの結構好きかも。でも逃がさないよー サツプーケイ！」

クロス・ニンジャがミスティクワードを発すると、世界がモノクロめいた色彩に変じ、目に見えぬ壁が漆黒の剣の面々とンファイアを殺戮空間へ閉じ込めた！これは一体!?

「魔法が発動しない!？」

ダインは自身の得意とするドルイド呪文が発動しない事に驚きの声を上げた。呪文が発動しない上に周囲の光景もモノクロ色彩のテンブルめいた場所になっている。

「イヤーツー」「アバーツ!？」

斬りかかったペテルのロングソードを、バイオバンブー籠手で受け止めていたクレマンティーンがペテルの首を回し蹴りではねたのだ。ペテルはダインの叫びの意味を理解する間も無く死んだ。

勢いよく噴き出す血がニニヤの顔にかかる。

「あ、あ… 嘘だ！こんなの嘘だ！ペテル、ペテル！」

「モータールにしては悪くない剣筋だったかなー ご褒美に君の死体は

辱しめないで置いてあげよー」

ペテルの首をはねた蹴り足を戻すとコロス・ニンジャは上機嫌そうにコロコロと笑った。

残るは呪文の使えないドルイド、肩を吹き飛ばされ地面に突っ伏す射手、魔法の使えないスペルキャスター、足手まといのモーターである。

「う、ウオオオオオ！なめるなである！」

ヤバレカバレ！ダインはメイスを振りかぶりクレマンティーヌに殴りかかる！

「イヤーツ！」「グワーツ！」

空中で激突したメイスとコロス・ニンジャのポン・パンチ！当然のようにメイスは砕け、そのまま殴り抜ける！

「イヤーツ！」「グワーツ！」「イヤーツ！」「グワーツ！」
「グワーツ！」「イヤーツ！」「グワーツ！」「イヤーツ！」
「グワーツ！」「グワーツ！」「イヤーツ！」「グワーツ！」
「グワーツ！」

ダインの巨体がコロス・ニンジャの拳撃連打によって宙に浮く！あまりのラッシュにダインの骨は彼のメイスの様に砕けた。ダインの最期の光景は、仲間の血に染まったクレマンティーヌの脚が顔面に向かってくるところだった。

「さ・て・と、ニニヤくんって言うのかなあ？あとはあなたただだよー」
「ひっ… マジックアロー！マジックアロー！マジックアロー！どうして発動しないの!? ナンデ!? マジックアロー！マジックアロー！「イヤーツ！」「グワーツ！」

「ちよーっと五月蠅かったかなー」

「ゲホッゲホッゴボボーツ！」

コロス・ニンジャにとつては何気無い蹴りの一撃も、ニニヤにとつては狂乱したアフリカゾウが振り回すメイスが腹部に直撃したようなダメージ！

「んふっ、まるで女の子みたい。その可愛いお尻をふりふりして皆に守ってもらってたんでちゆかー？」

「ッ!? 皆を馬鹿にするな!」

「ダマラツシエー!」

「ひいっ!」

一瞬にして増す威圧感。ニニヤは激しく失禁した。コロス・ニンジヤは言葉にはせぬが、その表情と態度でもってこの無力なスペルキヤスターの無能さを嘲笑った。

「S i k k o k u !」 「グワーツ!」

「ニニヤを馬鹿にするんじゃないやねえ!こいつは俺らの大事な仲間だ!」

呼吸すら止め、コロス・ニンジヤが油断する一瞬を待っていたルクルツトが短剣で一撃を入れた瞬間だった。

「… とも言うと思った?イヤーツ!」 「アバババーツ!」

一撃、だがそれだけだった。コロス・ニンジヤの反撃は滑らかにルクルツトの股関節を強打し、金的を破壊した。ルクルツトは無惨に悶死した。

「あ、あ、ルクルツト?ルクルツト?返事して下さいよお…」

「あつははははは!ホント傑作。 そんな弱点無防備にぶら下げてるのがいけないんだって感じ」

「みんなごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい役立たずでごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「イヤーツ!」 「ンアーツ!」

虚空を見つめて謝罪の言葉を呟くニニヤの右腕をチョップで切り飛ばす!

「イヤーツ!」 「ンアーツ!」 虚空を見つめて謝罪の言葉を呟くニニヤの左腕をチョップで切り飛ばす!

「イヤーツ!」 「ンアーツ!」

虚空を見つめて謝罪の言葉を呟くニニヤの右足をチョップで切り飛ばす!

「イヤーツ!」 「ンアーツ!」

虚空を見つめて謝罪の言葉を呟くニニヤの左足をチョップで切り飛ばす!

「んふふー ダルマみたいになっちゃったねー?」

このような状況ではあるが、ダルマというスレイン法国特有のタリスマンについて説明したいと思う。ダルマとは七大神が伝えた善なるフェアリーを象ったタリスマンである。大きな物から小さな物まで有るが、掌に乗るようなサイズが一般的でスレイン法国では子供たちが洗礼を受ける際には祝福された小さなダルマ・タリスマンをもらう慣習がある。

「飽きちゃった。じゃ、オタツシヤデー」「あつ、あつ、あつ、アバーツ!?」

クロス・ニンジャは極めて無造作かつゆつくりとニニヤの心臓をチョップ突きで抜き取り、握り潰した。

(やっぱり飽きるのが早いな。何かこう… 血沸き肉踊るような戦士存在と戦いたいな…)」

戦っている最中も、クレマンティーヌはどこか冷静に自分を見つめていた。邪悪な振る舞いをする自分を後ろから眺めている自分がいる。だからルクルットの不意打ちもあっさりとは捌けてしまった。

「カラテの不足故に孤独であり、ニンジャになれば強者であるが故にまた孤独ってね」

クレマンティーヌはクロス・ニンジャの精神的オーメンを外すと寂しげに微笑んでからンファイレーアを背負い、窓から夜の闇へと消えていった。

ナム・クツキングタイム

「… サワタリⅡサン」

漆黒戦士モモンは漆黒の剣の面々がいる場所から少し離れた河辺で膝を抱えていた。

「少しばかり探したぞ。思ってたよりも遠くに行っているんだからな」

サワタリとファイオがモモンの後ろに立つ。ファイオは奥ゆかしく、口を開かない。

「私はおかしいんでしょうか…？未だに去っていった皆の事を引きずっていて、つい感情的になってしまう。そうして感情的になった拳げ句に自爆して勝手に落ち込んでるんですもんね。変ですよね…：こんなのおかしいですよね…：」

否定して欲しいのか、無慈悲に肯定して欲しいのか。兜越しの声からは読み取ることが出来ない。

「何もおかしくはない」

「でも…」

「何もおかしくはない」

「アツハイ」

やや狂気を滲ませながらも、サワタリは決断的に否定した。二人がモモンを見つめる瞳には献身的なやさしみがあつた。

「そんなことより河がある！スシだ！」

さながら淀んだ空気を入れ換えるかのように、サワタリがわざとらしく明るい声を出した。

「ワーーー！アナゴヤッター！」

「ゴウ、ランガー！」

イエー！ファイオとサワタリはすかさずハイタッチを決めた！

「え？」

「モモンⅡサン、食べれなくとも食事は目で見て、鼻で嗅いで楽しむ事は出来るだろう。スシだぞ！」

「え？アツハイ。スシですか」

「リアルじゃ滅多に見れないヤツを握ってやるからな」

「アナゴヤツター！」

ファイオがピョンピョン跳び跳ねる。ネコネコカワイイジャンプだ。

十分後、サワタリ達の手元には4匹ものアナゴがあった。サワタリの野伏力にかかればベイビー・サブミッションである。

「では火をおこしますね」

モモンのガントレットの掌部分からフレイムスロワーめいて超自然の炎が発生する。接触魔法系統《火炎放射》だ。ゲーム内では術者の力量によって威力が増減するのが特徴的だった魔法だが、現実になった今、自在な火力を実現していた。暗黒鎧戦士状態では使用可能な魔法の数にかなりの制約が課されるがモモンは使用する魔法のスロットにこの魔法を登録していた。

近接戦闘を考慮しての事だったが、初めての出番がアナゴ焼きインシデントとは誰が予想出来ただろうか！

サワタリは手際よくアナゴを切り開き、内臓の類いを抜くと鉄串を打ち、塩をかけると火で炙り始めた。その横ではファイオが米を磨いでいる。ファイオはまるでこの三人が本当の旅仲間であるかのような気分になった。ナザリックに戻れば、全てのシモベというシモベが彼女の事を羨むだろう。

外見的には幼げな元気娘であるところのファイオは、そこに居るだけで周囲からの警戒心を弱める働きがあり、サワタリとモモンはプレアデスの様な見目麗しいタイプのシモベを連れて来ずにファイオを選んだ事を成功だと考えていた。

しかし、ファイオからすれば何をすることもなく演技しているだけで至高の御方の側に侍ることがただ一人許されている、というのは非常に居心地の悪い思いだった。

それが今は隣にサワタリがおり、ファイオの進捗を気にかけてシモベである自分のためにオーガニック・アナゴを焼いてくれている。モモンの思い出に土足で踏みいった人間には思うところがあるものの、ファイ

オは今の状況を喜ばしく思った。

あれよあれよという間に、アナゴスシの準備がなされフィオの腹からはクウと音がし、フィオは大いに赤面した。

「ではいただきますー！」

「いただきます」

「いやあ、しかし本当に見事なスシだ。もしかしてニンジャとはイタマエの別名なのでは？」

「それは順序が逆というものでぞ、モモン＝サン」

「え？」

「川でニンジャが魚を捌いているところを見ていたモータールに、ニンジャが戯れに包丁とマナイタを渡した。そしてそのモータールは歴史上最も古いとされるスシ・ドージョーをひらいたのだ」

「アツハイ、知りませんでした」

サワタリ様は物知りだなあとフィオはしみじみした。

(そういえばイタリアのナポリにナポリタンは無いという事を教えてくれたのもサワタリ様だったっけ。イタリアっていうのは随分遠い国らしいから、さすが世界を股にかけける戦士！スゴイ！)

「ちなみにナポリタンは物資の不足したナムの戦場で発明された料理なんだ」

まことしやかに語るサワタリの瞳は真剣だ。

「アイエ？ナポリ発祥じゃないんですか？」

「うむ。それは実際料理初心者が陥りやすい勘違いの1つだ」

火加減を調節しながらモモンは身振りで話の続きを促す。

「イタリア系の兵士でスキピオってやつがいた。こいつはいいやつだな、限られた材料で旨いものを作り出すタツジンだったんだ・・・」
「だった、ということとは・・・」

「ああ、死んだよ。ベトコンどものRPG攻撃でな。このレシピで隊の皆に旨いもの食わせてやってくれて、あとはマンマに勇敢に戦ったことを伝えてくれて言っただけ・・・」

「そんな酷い・・・」

フィオは思わず涙ぐみながらサワタリに寄り添った。磨いだ米は

既に飯盒の中だ。サワタリはやさしみに満ちた手つきでフィオを撫でた。

「いつかサワタリ〓サン Napoli タン食べさせて下さいね」

「おいしいモモン〓サンは食べれないだろ！骸骨だけに！」

サワタリが肩をすくめて言うのと、モモンは兜のスリットが入った部分を平手で軽く叩いて笑った。

「そうでした。骸骨だけに！」

ゴウランガ！なんとという骸骨ジョークだろうか！これはウイットに富んだ骸骨でなければ使いこなせない！

サワタリの握ったスシを頬張るフィオと、自信作のアナゴスシががつつくサワタリを見ていると、先程までの黒々としたモヤめいた気持ちが無くなっていることにモモンは気付いた。

仲間たちがのこしたNPC、そして一緒にこの異世界を冒険してくれるニンジャ存在。あれぐらいの言葉で気分を害するようでは現在残ってくれている者にシツレイだ。モモンは明日、ペテル達に詫びようと決めた。

何せこれから、大事な仲間とともに未知の世界を冒険するのだから。